改造文庫

第二部 第七十二篇

鶯の卵

土岐善麿著

改造社出版

改造文庫

第二部　第七十二篇

鶯の卵

土岐善麿著

改造社出版

漢詩邦譯に就て

漢詩の日本的なよみ方には一種特別の傳統があつて、いはゆる返り點に從ひ、詩吟句調で鑑賞することが普通になつてゐる。漢語ともつかず、日本語ともつかない。然し漢詩のおもしろみ、その情趣と、日本語の特有性、その生命とを一致させて、そこに新しい詩味を感じようとする試みは、相當ふるくから行はれ、古人がなか〳〵立派なものをみせてゐる。例へば、

燕子樓中霜月夜
秋來只爲一人長

といふ詩句を「新古今集」の歌人は、

ひとりのみ月と霜とに起きゐつつ
やがてわがよもふけやしぬらむ

とよんだ。また李白の

白髮三千丈　緣愁如箇長

不知明鏡裏　何處得秋霜

を忍海和尚は、

わが黒髪も白絲の
ちひろちひろにまたちひろ
憂さやつらさの增鏡
いづこよりかおく霜

と韻までふんでよんでゐる。

さぞやあの
花ふみ散らす鶯を
いなせてたもれ鳴かすなよ
鳴けばぞ賤が眠もあはず
戀しき人を夢にだに
見せぬわいな

この秋月玉山のものは、有名な金昌緒の

打起黃鶯兒
莫教枝上啼
啼時驚妾夢
不得到遼西

から來てゐる。また、

陌頭楊柳枝
已被春風吹
妾心正斷絕
君懷那得知

に對して、大江玄圃は、

ゆきかへるちまたの柳枝たれて、
春のあらしに吹かるめり
心亂れしこの憂さを
戀しき人の知るべくもがな

と試み、更に柳澤淇園も、

町のほとりの柳さへ

あれ春風がふくわいな
わしが心のやるせなさ
思ふ殿ごに知らせたい

と和げた。

室鳩巣は「駿臺雜話」の中に、楊巨源の「折楊柳」からとつて、

なれてふくなごりや惜しき青柳の
手折りし枝をしたふ春かぜ

の一首をつくつてゐるが、原作の

水邊楊柳緑煙絲
立馬煩君折一枝
唯有春風最相惜
慇懃更向手中吹

に比べて、なかなかうまいものである。

×

日本人ばかりではない。外國にも支那の詩篇を譯した人がある。L. Crammel-Byng もその

一人で、既に二十年以上も前の一九〇九年、ロンドンで出版したA Lute of Jade の中に、キ
に唐詩幾篇かをイギリス語になほし、白樂天の琵琶行や長恨歌まで手にかけるといふ意氣込みである。

彼の譯しぶりをみると、

THE LAST REVEL

From silver lamps a thin blue smoke is streaming,
And golden vases 'mid the feast are gleaming;
Now sound the lutes in unison,
Within the gates out lives are one.
We'll think not of the parting ways
As long as dawn delays.

When in tall trees the dying moonbeams quiver:
When floods of fire efface the Silver River,
Then comes the hour when I must seek

Lo-Yang beyond the furthest peak.
But the warm twilight round us twain
Will never rise again.

これは陳子昂の原作（本文七八頁參照）。
また李白のものでは子夜呉歌（本文一二五頁參照）もある。

UNDER THE MOON.

Under the crescent moon's faint glow
The washerwoman's bat resounds afar,
And the autumn breeze sighs tenderly.
But my heart has gone to the Tartar war,
To bleak Kansuh and the steppes of snow,
Calling my husband back to me.

近頃では、イギリスの東洋文藝研究家で、わが萬葉集や源氏物語、枕草子などを手にかけた Arther Waley 氏が、三百篇ばかり譯してゐる。また Edna Wordley Underwood 氏は Chi Hwang Chu 氏と協同して杜甫の詩篇を夥しくイギリス語になほしてみせた。フランス

にも、ドイツにも、こんな試みがある。

×

これら泰西人の試みは、もちろん拙いものでなく、また異常の苦心を思はせるが、然し漢詩に直接な趣味を感じ得る日本人にとつて、外國語が親しみの薄いことはいふまでもあるまい。且つ、外國人がそれほど多く自國語に紹介してゐる以上、日本人としても、もつと多く、その名作逸品を純正な日本語になほしてもいゝはずである。

わたしは古人のひそみにならつて、自分の愛誦するものを勝手に日本語になほしてみた。唐宋、元、明、清あたりから日本のものにも及び、最初それを一篇づゝ「アサヒグラフ」に連載したのは大正末期であつたが、二年間つゞいて、百七十餘篇に達したのである。それをまとめて「鶯の卵」一册をつくり、アルス書店から出版した。

×

然し、譯者にとつては、これは第二の理由で、第一の理由はかうしてやはらげた日本語をローマ字に綴ることが、おもな目的であつた。それでなくては、わたしとしては、漢詩和譯などチト物ずき過ぎた仕事である。

一體漢字の數はおよそ五萬餘といはれ、日常使はれるものだけでも、それの一割を要する。

しかも本家の支那すら現今では漢字の弊に堪へず、世界の文化に適應するやうローマ字を使はうとする運動さへ起つてゐるが、特に日本にとつては、日本語をうつすに漢字の不便不合理がますます甚しく、このまゝで行けば、いゝ日本語まで亡びてしまふやうな情勢である。世界の日本としても、日本の日本としても、これはまことに由々しいことでなければならない。

漢字は漢字、日本語は日本語である。漢字には漢字の情趣があり、日本語には日本語の生命がある。この二つは元來別々のものであるに拘らず、久しい歴史と慣習のために、本質的にわかつことのできないものゝやうに考へてしまつたものが少なくない。それの解放には、ローマ字日本語の普及運動を徹底させるほかはないのである。わたし達は、理論と實行とにおいてこの方面に種々な努力を費してゐるが、漢詩和譯はその一つの方法として、趣味的な方面から、特に漢字漢語に愛着を持つ人々に、日本語のいゝところ、その生命を感じてもらつて、國字改良の趣意を理解してもらはうといふ計畫なのである。

×

さういふことを考へたものも、しかしわたしが最初ではない。今から四十年餘も前、初期のローマ字國字運動が起つた當時、わたし達の先輩が試みたこともある。その一例をあげると、頼山陽の「泊天草洋」を次ぎのやうに試みてゐる。

泊天草洋

雲耶山耶呉耶越
水天髣髴青一髪
萬里泊舟天草洋
煙横蓬窓日漸沒
瞥見大魚波間跳
太白當船明似月

頼山陽

Kumo ka Yama ka to miwatasu wa,
Sore ka arann ka Go ka Etu ka?
Sora to Midu tono Kedime nasu
Sakai wa itodo kasuka nari.
Tisatono Umi wo watari kite,
Amakusa-nada ni yoru Hune no

Mado ni Kemuri no tanabikite,
Yûhi wa Nisi ni irini keri.

Nami no Awai ni Oto takaku
Odoreru Uo no Kage miete,
Hune no Itado wo iru Hosi no
Hikari wa Tuki ni samo nitari.

情景は相當によく傳へてゐる。たゞ原作の一句を七五、七五の二句にしてゐるから、これでは日本語の方が漢語よりも長くなるといふ非難には遺憾ながら甘んじなければならない。漢語を無上にあり難がる人々は、それを漢語の長所日本語の短所と考へてゐる。わたしは、この點で、もつと古い時代に範をとり、できるだけ緊縮した日本語で、同樣の情趣を傳へようとつとめた。

Kumo ka Yama ka Go ka Etu ka,
Ao hitosudino Midu ya Sora.
Amakusa no Oki ni Hune hatete,

Toma no Kemuri no Yûdukuhi.
Uo koso odore kasiko Nanima,
Kirameku Kinsei Tuki sanagara.

即ち、原作の一句を七五一句になほして、長さにおける比較からは非難されないことを努めてみた。

この點、また他の一例として孟浩然の有名な小品「春曉」をとつてみたい。

春曉

孟浩然

春眠不覺曉
處處聞啼鳥
夜來風雨聲
花落知多少

このうちの「春眠」を「春の眠」、「啼鳥」を「なく鳥」、「夜來」を「ゆふべから」、「風雨」を「あめかぜ」といふやうになほせば、一應漢語を日本語にしたことになるが、これでは詩趣語感、韻律などの點で、十分とはいひ難い。こんな直譯でなく、もつと香氣の高い・響きの高

い日本語の表現があるはずである。試みに、これを次ぎのやうに諷詠してみる。

Haru Akebono no Usunemuri,
Makura ni kayou Tori no Koe,
Kaze naziri naru Yobe no Ame,
Hana tiriken ka Niwa mo seni.

もう少し長いものを擧げてみよう。

妬花歌

昨夜海棠初帶雨
數朶輕影媚欲語
佳人曉起出蘭房
折來對鏡比紅粧
問郎花好妾顏好
郎道不如花窈窕
佳人聞語發嬌嗔
不信死花勝活人
把花揉碎擲郎前
請郎今夜抱花眠

唐寅

HANA WO NETAMU UTA.

Ame ni aketaru Kadô no
Hohoemi hukumu Hana no Kao.
Nezame adanaru Taoyame ni
Taorarete Iro mo Masukagami.
Idure wo kimi yo Hana ka ware ka,
Hana koso masare Adeyakasa.
Netasi kuyasi mo Taoyame no
Inoti hadirô Uramigoto.
Kimi ni zo yaran Hanatubute,
Koyoi wa Hana to nemuri mase.

原作の韻を日本語として合はせることも、困難ではないやうである。

×

日本語のすぐれてゐることを忘れ、漢語や漢字が簡單で、おもむきが深く、なかみが豐かだといふやうな考へに對して、最後に皮肉な事實を示しておきたい。それは賴山陽の「兵兒歌」である。

兵兒歌

衣至骭
袖至腕
腰間秋水鐵可斷
人觸斬人
馬觸斬馬
十八結交健兒社
北客能來何以酬
彈丸硝藥是膳羞
客猶不屬饜
好以寶刀加渠頭

賴山陽

殊に、この後の部分は、この漢語表現に對して日本語が齒が立たないやうにおもはれることも一應無理がない。然し、それは、こんなことになるのである。

HEKO NO UTA

Suso wa Sune made,
Sode wa Ude.
Kosi no Turugi wa Tetu mo tatu.
Hito ga sawareba Hito wo kiri,
Uma ga sawareba Uma wo kiru.
Wakasa wo tikau Heko-nakama.
Kita no Kyakuzin kuru naraba,
Ensyo Sakana ni Tama Esyaku,
Sore wo kikazuni kuru naraba,
Kubi ni Katana wo Hikidemono.

憚りながら、このあとの部分がなか〳〵いゝ日本語になつてゐるではないか。否、實は「なつてゐる」のではなく、白狀すると、これが原作なので、もと〳〵これが當時の薩摩の民謠なのであつた。山陽がそれを漢詩になほしたもので、この部分を比べてみても、漢語以上、日本語のあぢはひ、その本統の生命は感じられると思ふのである。

凡例

この一册に用ひたローマ字の綴り方、即ち日本式のそれに就ては、卷末（二四二頁――二五三頁）に大要を說明しておいたから、參考にしていたゞきたい。そして邦譯は、ローマ字によつて讀んでいたゞくことが固より最初の目的であるが、ローマ字日本語になれない讀者が、それに親しみのつくまで、また親しみをつけるためにも、漢字假名まじりを添へることが、便利であるとの意見に從つて、それを併せかゝげることにした。これはローマ字使用の趣旨からいふと、變則に相違ないが、宣傳的、啓蒙的にはやむを得ない妥協であることをローマ字論者も諒としてくれるであらう。そして絕句は同じページに掲げてあるがそれより長いものは、漢詩の題の下に番號をつけて、漢字假名まじりのものは卷末の方に（二一三頁――二四一頁）まとめた。

「鶯の卵」といふ書名は、ホトトギスなどが卵を鶯の巣に產みつけると、鶯はそれをも自分の子と一緒に孵化させるといふその事實に依つたもので、萬葉集にもそれをうたつた長歌がある。わたしの漢詩邦譯も、鶯の巣にかへるホトトギスの子とみられるか、あるひは本ものゝ鶯の卵か雛になつてみなくては判らない、そんな意味をふくめたのである。

目次

〔夏〕

〔秋〕

〔雜〕

「春」

鶯の卵

HARU AKEBONO.

Haru Akebono no Usunemuri,
Makura ni kayou Tori no Koe.
Kaze maziri naru Yobe no Ame,
Hana tiriken ka Niwa mo seni.

春曉

春眠不覺曉
處處聞啼鳥
夜來風雨聲
花落知多少

孟浩然

春あけぼの

春あけぼののうす眠り
枕にかよふ鳥のこゑ
風まじりなる夜べの雨
花散りけんか庭もせに

MIDUKARA NAGUSAMU.

Sake ni mukaite kururu wo sirazu,
Hanahubuki Koromo ni mitinu.
Tidoriasi Tuki ni ayumeba,
Tori kaeri Hito zo mare naru.

自遣

李白

對酒不覺瞑
落花盈我衣
醉起歩溪月
鳥還人亦稀

自ら慰む

酒に對ひて暮るるを知らず
花吹雪衣に滿ちぬ
千鳥足月に歩めば
鳥還り人ぞまれなる

ZEKKU.

E wa hukamidori Tori siroku,
Yama aokere ya Hana zo koki.
Kotosi no Haru mo tada sugite,
Itu ka kaeran Hurusato ni.

絶句

杜甫

江碧鳥逾白
山青花欲然
今春看又過
何日是歸年

絶句

江は深みどり鳥白く
山青けれや花ぞ濃き
今年の春もただ過ぎて
いつか歸らむ故郷に

ORI NI HURETE.

Kimi wa Hurusato yori kinu,
Hurusato no Koto wo siru ran.
Kono higoro Mado no mae naru
Kanbai wa Hana sakinuru ya.

雜詩

王維

君自故鄉來
應知故鄉事
來日倚窗前
寒梅著花未

折にふれて

君はふるさとより來ぬ
ふるさとの事を知るらむ
この日頃窓の前なる
寒梅は花咲きぬるや

UME NO HANA.

Magaki no motono Ume ikue,
Samusa wa sinogi Hana sakinu.
Yuki towa mimeya harukekumo
Kaori oboroni sinobi kuru.

梅花

王安石

牆角數枝梅
凌寒獨自開
遙知不是雪
爲有暗香來

梅の花

牆のもとの梅いくえ
寒さをしのぎ花咲きぬ
雪とは見めやはるけくも
かほりおぼろにしのびくる

HARUSAME.

Hanagumori Ame to nari,
Tabi ni yami Hada samusi.
Ume to mata wakarureba,
Obasima ni yoru mo usi.

春雨

春陰易成雨
客病不禁寒
又與梅花別
無因一倚欄

陸游

春さめ

花ぐもり雨となり
旅に病みはだ寒し
梅とまた別るれば
おばしまによるも憂し

MONBAIKAKU.

Haru ni tou : iduko yori kisi,
Haru wa kite iduko ni aru ya.
Tuki otite Hana mono iwazu,
Kodori nomi saeduri-kawasu.

問梅閣

問春何處來
春來在何許
月墮花不言
幽禽自相語

高青邱

問梅閣

春に問ふいづこより來し
春は來ていづこにあるや
月落ちて花もの言はず
小鳥のみ囀りかはす

KO-INKUN WO TADUNETE.

Midu mata Midu wo watarite,
Hana mata Hana wo nagametu.
E ni sou Miti no Harukaze,
Omowazu tukinu kimigari.

尋胡隱君

渡水復渡水
看花還看花
春風江上路
不覺到君家

高青邱

胡隱君をたづねて

水また水を渡りて
花また花をながめつ
江にそふ路の春風
思はずつきぬ君がり

ZYO-KOREN NI.

Waga Mati no kimi wa Higasi ni,
Waga Ie no Kodati mo miyu ya.
Kono mikka Harusame hukasi,
Aiomou Hana tiru Yûbe.

簡舒古廉

君居我巷東
望見我家樹
三日春雨深
相思落花暮

吳錫麒

舒古廉に

わが町の君は東に
わが家の木立も見ゆや
この三日春雨深し
相想ふ花散る夕べ

HARU NO KAGOTO.

Eda nya nakasuna neta Uguisu wo,
Naitya Yumedi de awarya senu.

春怨

打起黃鶯兒
莫敎枝上啼
啼時驚妾夢
不得到遼西

金昌緒

春のかごと

枝にやなかすなねた鶯を
ないちや夢路であはりやせぬ

TABI NITE.

Ukonno Kaori Umazake wo tugu ya na-
minami,
Tamano Sakaduki tadayou wa Kohaku
no Hikari.
Masite Aruzi ga Motenasi ni Kokoro mo
eite,
Mi wa tada tanosi Hurusato ni kuturogu
Omoi.

客中作

蘭陵美酒鬱金香
玉碗盛來琥珀光
但使主人能醉客
不知何處是他鄉

李白

旅にて

鬱金のかをりうま酒をつぐやなみ〳〵
玉のさかづきただよふは琥珀のひかり
ましてあるじがもてなしに心も醉ひて
身はただたのしふるさとに寛ぐおもひ

YAMA NI SAKE WO KUMI-KAWASITE.

Hutari kumikawaseba Hana koso sake,
Ippai ippai mata ippai.
Ware wa utura einu kimi wa yukine,
Akenaba koyo kasi Koto wo daite.

山中與幽人對酌

李白

兩人對酌山花開
一杯一杯復一杯
我醉欲眠君且去
明朝有意抱琴來

山に酒をくみ交す

二人くみかはせば花こそさけ
一杯いつぱいまた一杯
我はうつらゑひぬ君は行きね
あけなば來よかし琴をだいて

RI-KINEN NI AITE.

Tunedune misi kana Giô no Yasiki ni,
Ikutabi kikiken Saikyû ga Ie ni,
Kawabe no minami no kono Nagame ya,
Hana tiru Toki simo mata kimi ni aeri.

江南逢李龜年

杜甫

妓王宅裏尋常見
崔九堂前幾度聞
正是江南好風景
落花時節又逢君

李龜年に逢ひて

つねづね見しかな妓王の邸に
幾度聞きけむ崔九が家に
河邊の南のこの眺めや
花散る時しもまた君に逢へり

UTAGE NITE.

Hitotose ni hitotose no Haru wa ari,
Momotose ni momotose no Hito wa nasi.
Hanakage ni ikutabi ka yoi en ya,
Madusi tomo Umazake wo kaitemasi.

宴城東莊

崔敏童

一年始有一年春
百歲曾無百歲人
能向花前幾回醉
十千沽酒莫辭貧

宴にて

一年にひととせの春はあり
百歲にももとせの人はなし
花かげにいくたびか醉ひえんや
貧しともうま酒を買ひてまし

GENZI GA ANSAI NI TUKAI TOSITE YUKU WO OKURU.

Sato no Asaame sittorito,
Yanagi-wakame mo Tabigokoro,
Kimi kasaneyo ya Sakaduki wo,
Seki wo koereba mizu sirazu.

送元二使安西

王維

渭城朝雨裛輕塵
客舍青青柳色新
勸君更盡一杯酒
西出陽關無故人

元二が安西に使として行くを送る

さとの朝雨しつとりと
柳若芽も旅ごころ
君かさねよやさかづきを
關をこえればみず知らず

TUMA NO KAGOTO.

Urei wo siranu Taoyame ga
Haru Yosooi no Takadono ya.
Mati no Aoyagi Se zo koisi,
Na ni akugarete okurisi ka.

閨怨

王昌齡

閨中少婦不知愁
春日凝粧上翠樓
忽見陌頭楊柳色
悔教夫壻覓封侯

妻のかごと

憂を知らぬたをやめが
春よそほひの高殿や
町の青柳背ぞ戀し
名にあくがれておくりしが

ZYOSYUU NO NISI NITE.

Simizimi mireba Kisibe ni Ogusa oite,
Aogeba Uguisu Kozue no Sigemi ni naku.
Amage no Yûgure Usio wa iyoyo hayaku,
Watasi ni Hito nasi Hune nomi tada yo-
kotau.

滁洲西澗

韋應物

獨憐幽草澗邊生
上有黃鸝深樹鳴
春潮帶雨晚來急
野渡無人舟自横

滁洲の西にて

しみじみ見れば岸邊に小草おひて
あふげば鶯梢のしげみに鳴く
雨氣の夕ぐれ潮はいよよ早く
渡に人なし船のみただよふ

YANAGI WO ORU.

Kisi no Aoyagi honobonoto,
Koma tomete taoru hitoeda wo,
Nagori ya osiki Haru no Kaze,
Sitaite zo huku Tanagokoro.

折楊柳

水邊楊柳綠煙絲
立馬煩君折一枝
唯有春風最相惜
慇懃更向手中吹

楊巨源

柳を折る

岸の青柳ほのぼのと
駒止めて手折る一枝を
名殘りや惜しき春の風
慕ひてぞ吹くたなごころ

HARU NO ASAI.

Higoro no Kuse no Hutukaei Asai no Toko ni,
Minami no Yama wo ne tutu mite Utahogo-idiri.
To akureba Hi wa takasi Haru no sabisisa,
Saeduru Tori no Koegoe ya Hana no Konoma ni.

春日晏起

近來中酒起常遲
臥見南山改舊詩
開戸日高春寂寂
數聲啼鳥上花枝

韋莊

春のあさい

日頃のくせのふつかゑひあさいの床に
南の山を寢つつ見て歌反古いぢり
戸開くれば日は高し春のさびしさ
さへづる鳥の聲聲や花の木の間に

YAYOI TUGOMORI.

Kyô koso Yayoi Tugomori,
Utai mo tukinu Nagori no Nagame ni,
Koyoi wa kimi to akasan,
Akatuki Kane naru made wa Haru nari.

三月晦日

三月正當三十日
風光別我苦吟身
共君今夜不須睡
未到曉鐘猶是春

賈島

彌生つごもり

今日こそ彌生つごもり
うたひも盡きぬ名殘の眺めに
今宵は君と明さん
あかつき鐘なるまでは春なり

HARU NO OMOI.

Kusa aoaoto Yanagi kibami,
Momo sakimidare Sumomo kaoru,
Harukaze Urei wo huki mo sarazu,
Harubi wa Urami to tomoni nagasi.

春思

草色青青柳色黄
桃花歴亂李花香
春風不爲吹愁去
春日偏能惹恨長

賈至

春の思

草靑靑と柳黄ばみ
桃咲きみだれ李かほる
春風うれひを吹きも去らず
春日はうらみと共にながし

YAYOI TUGOMORI
ZIONZI NI KAKU.

Zion no Haru mo kesa bakari,
Hinemosu yoru ya Tera no To ni,
Haru wa todomen Sube mo naku,
Hudi no Hanakage Hi wa kurete.

三月晦日題慈恩寺

白居易

慈恩春色今朝盡
終日徘徊倚寺門
惆悵春歸留不得
紫藤花下漸黄昏

彌生つごもり慈恩寺に書く

慈恩の春も今朝ばかり
終日よるや寺の戸に
春は止めん術もなく
藤の花かげ日は暮れて

TUTUMI NO HARUGUSA.

Hana tiru Dote no Usukemuri,
Aogusa tuduku Amaagari,
Kuruma na kisiri kono Nobe wo,
Sibasi madoromu Eigokoti.

曲江春草

鄭谷

花落江堤簇暖煙
雨餘草色遠相連
香輪莫輾青青破
留與遊人一醉眠

堤の春草

花散る土手の薄けむり
青草續く雨あがり
車なきしりこの野邊を
しばしまどろむ醉心地

KOTOO TO ASOBITE.

Midu hiroki Nobe no Wakakusa,
Yuki kiete Soyokaze urara,
Kazu sirazu Kuruma wa kisire,
Tare ga Ko zo nodoni ayumu wa.

與賈島閑遊

張籍

水北原南草色新
雪消風暖不生塵
城中車馬應無數
能解閑行者幾人

賈島と遊びて

水ひろき野邊の若草
雪消えてそよ風うらら
數知らず車はきしれ
たれが子ぞのどに歩むは

SOZORONI.

Koie Kyaku nasi Ame ni Koke hukaku,
Take ni tatisou Enzyu Niwa mo seni,
Haru no Urei ya Yume mo utura utura,
Uguisu no Ne ni Nemuri huto samete.

即事

杜牧

小院無人雨長苔
滿庭脩竹閒踈槐
春愁兀兀成幽夢
又被流鶯喚醒來

そぞろに

小家客なし雨に苔深く
竹に立ちそふえんじゆ庭もせに
春のうれひや夢もうつらうつら
鶯の音に眠ふとさめて

YAYOI.

Yayoi no Koro no Sitodoame,
Mitiyukibito no Tama kiete,
Sakaya wa iduko Miti toeba,
Anzu no Mura wo sasu Warabe.

清明

杜牧

清明時節雨紛紛
路上行人欲斷魂
借問酒家何處有
牧童遙指杏花村

彌生

彌生の頃のしとど雨
道行き人の魂きえて
酒屋は何處みち問へば
杏の村をさすわらべ

HARU NO YO.

Hitotoki osiki Haru no Yoi ya,
Tuki ni Kage ari, kaoru wa Hana;
Takadono kasukani moru Utabue,
Hurakoko tarete Yoru wa siduka.

春夜

蘇東坡

春宵一刻直千金
花有清香月有陰
歌管樓臺聲細細
鞦韆院落夜沈沈

春の夜

ひととき惜しき春の宵や
月に影ありかをるは花
高樓かすかに洩る歌笛
ふらここ垂れて夜は靜か

KOTAEUTA.

Nasi honoziroku Yanagi aomi,
Yanagi koborete Hana zo sakari,
Hitoki no Yuki no Obasima ya,
Inoti narikeri Haru Yayoi.

和孔密東欄梨花

梨花淡白柳深青
柳絮飛時花滿城
惆悵東欄一株雪
人生看得幾清明

蘇東坡

こたへ歌

梨ほの白く柳青み
柳こぼれて花ぞさかり
一樹の雪のおばしまや
命なりけり春やよひ

HOORAKUTEI NO HARUASOBI.

Eda sasikawasu Midorigi Yamadori naki,
Kaze uraurato tobi yuku Hanabira nari.
Tori utaiture Hana mai ware koso yoe,
Asu Sake sameba hayakumo Haru yuku-
besi.

豐樂亭春遊

綠樹交加山鳥啼
晴風蕩漾落花飛
鳥歌花舞太守醉
明日酒醒春已歸

歐陽修

豐樂亭の春遊

枝さし交す綠樹山鳥啼き
風うらうらと飛びゆく花びらなり
鳥歌ひつれ花舞ひわれこそ醉へ
あす酒醒めば早くも春ゆくべし

ROKYOO WO OKURU.

Nagisa tôku Hi nanameni Omoi harukesi,

Hana wa tiru Wakare no Sakaduki ni, Yanagi wa Hune ni,

E no minami E no kita Aogusa sigeku,

Kimi wo okureba hata Haru wo okuru Urei seti nari.

送呂卿

遠汀斜日思悠悠
花拂離觴柳拂舟
江北江南芳草遍
送君併得送春愁

高青邱

呂卿を送る

渚遠く日斜に思はるけし
花は散る別れのさかづきに柳は船に
江の南江の北青草しげく
君を送ればはた春を送る憂せちなり

AME NO ASA.

Igeta no Karasu honobonoto kiyuru Kemuri ni,

Hana tiru Sora no Ususamusa Sitone wo usumi,

Himabito nareba Hi harete Koto mo nasi ya,

Amekaze kesa koso matamo nemuriiramasi.

雨中曉臥

井桁烏啼破曙煙
輕寒薄被落花天
間人晴日猶無事
風雨今朝正合眠

高青邱

雨の朝

井桁の烏ほのぼのと消ゆる煙に
花散る空のうす寒さしとねをうすみ
ひま人なれば日晴れて事も無しや
雨風今朝こそまたもねむり入らまし

HARU NO HI.

Mura no Higasi no Yama aomi,
Yanagi sidaruru Tanimakaze,
Nobe wo yoso naru Murakodori,
Koniwa no Hana wo tome-kurasu.

春日雜詠

高珩

青山如黛遠村東
嫩綠長溪柳絮風
鳥雀不知郊野好
穿花翻戀小庭中

春の日

村の東の山青み
柳しだるる谷間風
野邊をよそなるむらこどり
小庭の花をとめくらす

TYOO DOOSI WO TADUNETE KABE NI KAKU.

Urarabi no kimi ga Kadobe ya,
Tori nemuru Ike no Wakakusa.
Arasi tatimati Momo no Hana no Ame,
Toko ni simeru Koromo no sirosa.

訪張道士題壁

錢謙益

道士門前春日溫
池塘芳草睡鵞群
山風忽送桃花雨
濕遍床頭白練裙

張道士をたづねて壁に書く

うらら日の君がかどべや
鳥ねむる池の若くさ
嵐たちまち桃の花の雨
床にしめる衣のしろさ

YUKUHARU.

Kinô Ikebe no Otamazyakusi,
Kyô wa Ikebe ni naku Kawadu,
Nagaruru Hikari awatadasi,
Wakaba no Kado no Amaagari.

晩春絶句

池塘昨日科斗生
池塘今日蝦蟆鳴
轉眼流光太容易
綠蔭門巷看新晴

吳錫麒

ゆく春

きのふ池邊のおたまじやくし
今日は池邊になく蛙
流るる光あわただし
若葉の門の雨上り

AME NI NAYAMU.

Yami-husu ya Haru wo Sube nami,
Hito no Ie tomaru mo turasi.
Hana netamu Amekaze turena,
Haru wa oe Urei wa owanu ni.

苦雨

一臥經春百事休
寄人廡下苦淹留
妬花風雨無情極
只送春光不送愁

陳謨

雨になやむ

病みふすや春をすべなみ
ひとの家泊るもつらし
花ねたむ雨風つれな
春は追へ憂はおはぬに

HARU NO HI NI.

Kurenai nagasu Hana no Ame ni,
Kokoroyuku Uta no Hudezusami.
Waga Monousa ka Haru no Kumo,
Mine ni zo yadoru Hi takaki ni.

春日雜詩

千枝紅雨萬重煙
畫出詩人得意天
山上春雲如我懶
日高猶宿翠微巓

袁枚

春の日に

紅流す花の雨に
こころゆく歌のふですさみ
わがものの憂さか春の雲
峯にぞ宿る日高きに

TABIBITO NO UTA.

Haha ga nuimasu Mite no Ito,
Kiru mo kasikosi Tabigoromo.
Nuime mo itodo komayakani,
Kaeru wa itu zo obotukana.
Ogusa no Kokoro ikade waga
Haru no Megumi ni mukuyubeki.

遊子吟（一）

慈母手中線
遊子身上衣
臨行密密縫
意恐遲遲歸
難將寸草心
報得三春暉

孟郊

HARU NO NAGAME.

Kuni yaburete Yamakawa wa ari,
Haru nare ya Sirobe no Midori.
Hana mireba Namida sitodoni,
Tori kikeba Kokoro odoroku.
Norosi no Hi mituki taesezu,
Tieni koisi Hurusato no Humi.
Sirakami wa iyoyo mizikaku,
Kazasi sae sasi mo kaneturu.

春望（二）

國破山河在
城春草木深
感時花濺涙
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

杜甫

HARU NO YO AME WO YOROKOBU.

Orikara ya Ame sitositoto,
Harugokoro tokimeku narasi.
Kaze maziri Hi wa tasogarete,
Nureiro no Oto mo oboroni,
No no Komiti Kumo ni Aya naku,
Kawabune no Hi zo tada akaki.
Asa mireba Kurenai nurete,
Hana omosi Nisiki no Miyako.

春夜喜雨（三）

好雨知時節
當春乃發生
夜風潛入夜
潤物細無聲
野徑雲俱黑
江船火獨明
曉看紅濕處
花重錦官城

杜甫

YORU SASI NO IE NO UTAGE NI.

Zawameku Hayasi Tuki otite,
Tamoto sitodoni Koto hareba,
Seseragi kuraki Hanakomiti,
Nokiba kirameku Hosikage ya,
Tomosi wa akaki Humi no ue,
Sakaduki hukaki Turugitati,
Utahude okeba Hunauta no
Kobune ukenisi koisi mo ware wa.

夜宴左氏莊（一）

風林纖月落
衣露淨琴張
暗水流花徑
春星帶草堂
檢書燒燭短
看劍引盃長
詩罷聞吳詠
扁舟意不忘

杜甫

HURUDERA NO USIRO.

Akebono kureba Hurudera,
Asahi zo Kozue teraseru.
Komiti wa iyoyo hosomite,
Kuri niwa Hana mo kobukaku,
Yamakage Tori wa yorokobi,
Aobuti Hito wa nagomiru.
Atari wa tadani sidukani,
Utigane hitotu kikoyuru.

破山寺後禪院（五）

清晨入古寺
初日照高林
曲徑通幽處
禪房花木深
山光悅鳥性
潭影空人心
萬籟此俱寂
惟聞鐘磬音

常健

HARU NO YO, TOMO NI WAKARU.

Siroganeno Akasi kemuri aoku,
Sikimono ni hayuru koganeno Taru.
Hanare no Hitoma ni Kotodi tatete,
Wakare yuku Miti no Hate mo sirazu.
Tukikage wa oboro Kozue takami,
Akatuki wa tikasi Kawa zo siramu.
Ima wa tote sareba Miyako iduko,
Itu ka mata kokoni kimi to awan.

春夜別友人（六）

銀燭吐青煙
金尊對綺筵
離堂思琴瑟
別路繞山川
明月隱高樹
長河沒曉天
悠悠洛陽去
此會在何年

陳子昂

HATUHARU.

Nokonno Samusa Yuki kiete,
Niwakani nukumu Urarakesa.
Tosi aratanaru Hitogokoro,
Haru yomigaeru Ametuti ya,
Aomu Yanagi no Usukemuri,
Ato azayakeki Yakenogusa.
Haru wa amaneki Soyokaze no
Waga Kadobe nimo huki kayou kana.

新春（七）

餘凍雪纔乾
初晴日驟暄
人心新歲月
春意舊乾坤
煙碧柳回色
燒青草返魂
東風無厚薄
隨例到衡門

眞山民

AKATUKI YAMA WO YUKU.

Kado idete tomonau wa tare,
Hudino Tue tuki tutu zo yuku.
Yamamiti wa itiri mata niri,
Akatuki no Uguisu no Koe.
Minemine wa mietewa kakure,
Asahikage haretewa kumoru.
Iduko naran Mitera no kata wa,
Kane sumeri Hayasi hedatete.

曉行山間（八）

出門誰是伴
只約瘦藤行
一二里山逕
兩三聲曉鶯
亂峰相出沒
初日乍陰晴
僧舍在何許
隔林鐘磬清

眞山民

KAKUREI.

Iyasiki mo takaki mo aredo,
Kado idureba mina Yosugi naru.
Tada hitori Mono ni hikarezu,
Kakurei no Kokoro ni hitaru.
Sitodoame Yo no mani sugite,
Harugusa no ôru mo sirazu,
Yama aomi Akebono saseba,
Kodorira wa Ie meguri naku.
Arutoki wa Hiziri nimo ai,
Arutoki wa Soma to ture yuku.
Orokanaru Mi wa Sube mo nasi,
Yo no Sati wo utomu naranaku.

幽居（九）

貴賤雖異等
出門皆有營
獨無外物牽
遂此幽居情
微雨夜來過
不知春草生
青山忽已曙
鳥雀遶舍鳴
時與道人偶
或隨樵者行
自當安蹇劣
誰謂薄世榮

韋應物

KYAKU WO MUKAETE.

Minami mo Kita mo Haru no Midu ya,
Higoto ni kitaru wa Kamome no Mure.
Towaneba harawazu Hana no Komiti,
Siorido kyô koso kimi ni hirake.
Sakana wa hitosina Iti wo tômi,
Madusiki nagarano Moromi wo kume.
Tonari no Okina to nomu to iwaba,
Mabarano Kakigosi koyo to yobame.

客至（一〇）

杜甫

舍南舍北皆春水
但見群鷗日日來
花徑不曾緣客掃
蓬門今始爲君開
盤飧市遠無兼味
樽酒家貧唯舊醅
肯與鄰翁相對飲
隔籬呼取盡餘杯

SONO NO UME.

Hana mina tirite tada hitori
Sono no Huzei wo atumetari.
Kage zo Aya nasu Midu asami,
Ka yawa kakururu Yûdukuyo.
Tomari madoeru Simo no Tori,
Tyô wa Kokoro wo midasu ran.
Kutizusami tutu samayoeba,
Danban mo Sake mo Yô mo nasi.

山園小梅（一一）

林和靖

衆芳搖落獨暄妍
占盡風情向小園
疎影橫斜水淸淺
暗香浮動月黃昏
霜禽欲下先偸眼
粉蝶如知合斷魂
幸有微吟可相狎
不須檀板共金尊

"SATUKI NO AME WA IMA HARETE" NO UTA.

Yasaibata Ame ima harete,
Nobe ni mituru Wakaba no Kumori.
Numa no Nami Nokiba ni haete,
Kumo osamari Tôyama aosi.
Hinatubame Midu tobi tukare,
Hana no Tyô Yume wa sametari.
Aoarasi Tanomo yutakeku,
Koma tomete kiku Uta mo medurasi.

賦得四月清和雨乍晴（一二）

李文淵

小園香銷雨乍停
陰陰新綠遍郊坰
波添曲沼當軒碧
雲斂遙峰入座青
掠水燕雛飛欲倦
宿花蝶羽夢初醒
薰風到處田禾好
爲愛農歌駐馬聽

HANA WO NETAMU UTA.

Ame ni aketaru Kaidô no
Hohoemi hukumu Hana no Kao.
Nezame adanaru Taoyame ni
Taorarete Iro mo Masukagami.
Idure wo kimi yo Hana ka ware ka,
Hana koso masare Adeyakasa.
Netasi kuyasi mo Taoyame no
Inoti hadirô Uramigoto.
Kimi ni zo yaran Hanatubute,
Koyoi wa Hana to nemuri mase.

妬花歌（一三）

唐寅

昨夜海棠初帶雨
數朵輕影媚欲語
佳人曉起出蘭房
折來對鏡比紅粧
問郎花好妾顏好
郎道不如花窈窕
佳人聞語發嬌嗔
不信死花勝活人
把花揉碎擲郎前
請郎今夜抱花眠

HATASIGOTO WO AWAREMU.

Hatatukuri Hikari wa Mahiru,
Hatatuti ni Ase koso sime.
Tare ka siru Hati no nakano Ii,
Hitotubu mo Sinku no Tane.

憫農

李公垂

鋤禾日當午
汗滴禾下土
誰知盤中飧
粒粒皆辛苦

畑仕事を憐む

畑作り光はま晝
畑つちに汗こそしめ
誰か知る盤の中の飧
一粒も辛苦の種

SUZUSISA.

Matukage no Tesuri ni tuduku Sazanami
ya,
Kemuri suzusiki Usudukiyo,
Midutori no Sayo no Negura no sazamekite,
Hasu no Soyokaze Tuyu zo katamuku.

涼思

呉融

松間小檻接波平
月澹煙沈暑氣清
半夜水禽棲不定
綠荷風動露珠傾

涼しさ

松影のてすりに續く小波や
煙涼しき薄月夜
水鳥の小夜のねぐらのさざめきて
蓮のそよ風露ぞ傾く

YAMA NO ADUMAYA NO NATU.

Aobakage Natu no Hinagasa,
Ikemidu ni Kage sasu Utena.
Misu kaesu Soyokaze hukite,
Ka zo ahururu hitoe Hanabara.

山亭夏日

高駢

緑樹陰濃夏日長
樓臺倒影入池塘
水晶簾動微風起
一架薔薇滿院香

山の亭の夏

青葉蔭夏の日長さ
池水に影さすうてな
簾かへすそよ風ふきて
香ぞあふるる一枝花ばら

HATUNATU.

Satuki no Ame wa ima harete,
Minami no Yama wa azayakani,
Yanagi no Hana no tobi mo sezu,
Himawari nomi zo Hi ni mukau.

初夏

司馬光

四月清和雨乍晴
南山當戸轉分明
更無柳絮因風起
惟有葵花向日傾

初夏

五月の雨は今霽れて
南の山は鮮やかに
柳の花の飛びもせず
ひまはりのみぞ日に向ふ

NISI NO IE NITE.

Zakuro Ha ni hayuru Hana wa imada,
Enzyu Amamoyoi Kokage kurasi.
Toikuru Hito mo naki Syosai nare ya,
Aogoke Tori no Ato Niwa wo hiromi.

夏日西齋卽事

榴花映葉未全開
槐影沈沈雨勢來
小院地偏人不到
滿庭鳥迹印蒼苔

司馬光

西の家にて

ざくろ葉に映ゆる花はいまだ
ゑんじゆ雨もよひ木蔭暗し
訪ひ來る人も無き書齋なれや
青苔鳥の跡庭をひろみ

GAKUTYO NO TAKADONO NITE.

Yama no Kage Midu no Hikari ni tura-
narite,
Hatisu ni maziru Hisi no Ka ya,
Ta ga Mono naranu Tuki to Kaze,
Takadono no Yo wa tada suzusi.

鄂渚南樓書事

四顧山光接水光
凭闌十里芰荷香
清風明月無人管
併作南樓一夜涼

黄庭堅

鄂渚の高樓にて

山の影水の光に連りて
蓮にまじるひしの香や
誰がものならぬ月と風
高樓の夜はただ涼し

SUZUMI.

Yoru no Atusa Hiru ni kawarazu,
Kado idete Tuki ni tatazumu.
Yabukage ni Musi wa sudakite,
Kaze naki ni Suzusisa zo waku.

夏夜逐涼

楊萬里

夜熱依然午熱同
開門小立月明中
竹深樹密蟲鳴處
時有微涼不是風

涼み

夜の暑さ晝に變らず
門出でて月にたたずむ
籔蔭に虫はすだきて
風なきに涼しさぞわく

TAUE.

Uekomu ya Nawasiro no Midori-samusiro,
Midu asami Sazanami no Usuginu yurete,
Sayasayato Aogusa no nabiku wo kikeba,
Tanosisa yo Toyodosi no Yorokobi no
Koe.

挿秧

范成大

種密移疎綠毯平
行間淸淺縠紋生
誰知細細青青草
中有豐年擊壤聲

田植

植込むやなは代の綠さむしろ
水淺み小波の薄衣ゆれて
さやさやと青草のなびくを聞けば
樂しさよ豐年の喜びのこゑ

SUZUMI.

Suzusisa oite hiku Tue ya,
Hasi no Minami ni Mi wo okeba,
Tuki ni hibikou Hune no Hue,
Kaze ni Ka wa sou Hasu no Hana.

納涼

携杖來追柳外涼
畫橋南畔倚胡床
月明船笛參差起
風定池蓮自在香

秦觀

涼み

涼しさ追ひて引く杖や
橋の南に身を置けば
月にひびかふ船の笛
風に香は添ふ蓮の花

MANATU.

Hiderigumo Oozora wo yaki,
Hiru no Mi wa Kosiki no nakani.
Tuki no Miyako soko ni yukaneba,
Utiwa toredo Soyokaze mo nasi.

大暑

日干雲飛火燎空
白日渾如墮甑中
不到廣寒冰雪窟
扇頭能有幾多風

趙元

眞夏

日照雲大空を燒き
晝の身はこしきの中に
月の都そこに行かねば
團扇とれどそよ風もなし

ATUKI YO NI.

Aa koyoi Musiatusa taegatasi,
Kado idureba Kozue niwa Tuki aomi,
Takadono ni Amanogawa nagare tutu,
Soyo to dani huku Kaze mo nasi.

暑夜

釋宗泐

此夜炎蒸不可當
開門高樹月蒼蒼
天河只在南樓上
不借人間一滴涼

暑き夜に

ああ今宵蒸暑さ堪へ難し
戸出づれば梢には月青み
高殿に天の川流れつつ
そよとだにふく風もなし

SUZUMI.

Kono mutuki Kamuri mo tukezu,
Kumo hukaku Hana wo Dakine ya,
Tutome senu Mi no Tanosisa wa
Minaduki wo Hito ni hokoran.

鎖夏詩

袁枚

不著衣冠近半年
水雲深處抱花眠
平生自想無官樂
第一驕人六月天

涼み

この六月冠も著けず
雲深く花を抱寢や
つとめせぬ身の樂しさは
水無月を人にほこらむ

KIZAHASI NO URAMI.

Tamano Kizahasi Siratuyu no
Huketewa simeru Akituhire,
Oroseba Osu no uti nagara,
Tuki no Hikari wa sayakekute.

玉階怨

李白

玉階生白露
夜久侵羅襪
却下水晶簾
玲瓏望秋月

階の怨

玉の階白露の
ふけてはしめる蜻蛉ひれ
おろせばをすのうちながら
月の光はさやけくて

SIDUKEKI YO NO OMOI.

Toko ni sasu Tukikage,
Utagainu Simo ka to.
Aogitewa Yama no Tuki wo mi,
Unadaretewa omou Hurusato,

静夜思

李白

牀前看月光
疑是地上霜
擧頭望山月
低頭思故郷

静けき夜の思ひ

とこにさす月影
疑ひぬ霜かと
仰ぎては山の月を見
うなだれては思ふふるさと

HATUAKI NO YO WO HITORI.

Ido no Aogiri Hakaze suzusiku,
Tonari no Kinuta Aki no Koe ari.
Nokiba ni tikaki Hitorine ya,
Nezame no Tuki wa Makurabe ni.

古秋獨夜

白居易

井梧涼葉動
隣杵秋聲發
獨向檐下眠
覺來半牀月

初秋の夜を一人

井戸の梧桐葉風涼しく
隣りの杵秋の聲あり
軒端に近き獨り寢や
ねざめの月は枕邊に

YORU NO AME.

Koorogi taedaeni,
Kurami akamu Tomosi ya,
Tonomo no Yoru no Ame,
Madu sayagu Baseoba.

夜雨

白居易

早蛩啼復歇
殘燈滅又明
隔窗知夜雨
芭蕉先有聲

夜の雨

こほろぎたえだえに
暗み明むともしや
外の面の夜の雨
まづさやぐばせをば

E WO YUKITE.

Hitohabune Nemuri yasurani,
Kaze sayasaya Sazanami mo nasi.
Sozoro yuku Asi no Kisibe ya,
Yomosugara Aki no Koe ari.

江行無題

穩睡葉舟輕
風微浪不驚
任君蘆葦岸
終夜動秋聲

錢起

江を行きて

一葉船眠り安らに
風さやさや小波もなし
そぞろゆく葦の岸邊や
よもすがら秋の聲あり

"HATI" NI DAISU.

Kama wo Kosi ni iduku ni yuku ya,
Akinira wo Hatake ni kari ni.
Kataru mo usi usi ya Yononaka,
Nagekiuta Kikori to awasu.

題灞池

腰謙欲何之
東園刈秋韭
世事不復論
悲歌和樵叟

王昌齡

灞池に題す

鎌を腰にいづくに行くや
秋韭を畠に刈りに
語るもうし憂しや世の中
嘆き歌きこりとあはす

AKIKAZE.

Akikaze wa iduko yori kuru,
Sayasayato Kari wo okurite,
Asamadaki Niwaki ni hukeba,
Itihayaku Tabibito zo kike.

秋風引

劉禹錫

何處秋風至
蕭蕭送雁群
朝來入庭樹
孤客最先聞

秋風

秋風はいづこより來る
さやさやと雁を送りて
朝まだき庭樹に吹けば
いち早く旅人ぞ聞け

MOKURAN NO MAGAKI.

Aki no Yama Hi no usudukeba.
Tomo oite Tori mo isogu ka.
Huto akamu midorino Hikari,
Yûarasi huki suginu rasi.

木蘭柴

王維

秋山斂餘照
飛鳥逐前侶
彩翠時分明
夕嵐無處所

木蘭のまがき

秋の山日の薄づけば
侶おひて鳥も急ぐか
ふとあかむ緑の光
夕嵐吹き過ぎぬらし

SUZUSIKI YORU NO UTA.

Tuki wa Nakazora ni,
Kaze wa Minomo ni,
Kono Sugasisa wo
Ube nari ya siru Hito zo mare.

清夜吟

邵康節

月到天心處
風來水面時
一般清意味
料得少人知

涼しき夜の歌

月は中空に
風は水面に
このすがしさを
うべなりや知る人ぞまれ

MADO.

Higasidonari Yanagi wo ômi,
Ame no Oto Yoru awatadasi.
Mado no moto hitori nemurazu,
Aki no Musi Tomosibi ni yoru.

軒窓

蘇東坡

東隣多白楊
夜作雨聲急
窻下獨無眠
秋蟲見燈入

窓

東隣り柳を多み
雨の音夜あわただし
窓の下ひとり眠らず
秋の虫ともしびによる

TUKI WO MOTEASOBU.

Tuki koso hitotu madokani,
Yorokobi to Urei wo terasu,
Yorokobi mo Urei mo motazu,
Kage sayaka Obasima noboru.

玩月

許宜媖

一種月團圞
照愁復照歡
歡愁兩不著
清影上闌干

月を玩ぶ

月こそ一つまどかに
喜と憂を照す
喜も憂ももたず
風さやか闌干のぼる

HURUKI KOKORO WO.

Tama no Kizahasi kiyomureba,
Simo ka Yuki ka mo sirazirato,
Osu tarete hiku Kugo no Te ni,
Aki no Tuki koso mi no taene.

古意

崔國輔

淨掃黃金階
飛霜皎如雪
下簾彈管篌
不忍見秋月

古き心を

玉の階清むれば
霜か雪かも白じらと
小簾たれてひく管篌の手に
秋の月こそ見のたへね

AKI NO ASA KAGAMI WO MITE.

Otiba odoroku Tabigokoro,
Akikaze kiku ya yomosugara,
Asa no Kagami ni Kosikata no
Sugata nagamuru wabisisa ya.

秋朝覧鏡

薛稷

客心驚落木
夜座聽秋風
朝日看容鬢
生涯在鏡中

秋の朝鏡を見て

落葉おどろく旅心
秋風聞くや夜もすがら
朝の鏡にこしかたの
姿ながむるわびしさや

MURA NO YORU.

Aoziramu Simo no Ogusa no Musi no
Ne ni,
Yuku Hito taesi Mura no Miti,
Hitori Kadobe ni tatazumeba,
Soba no Hana Yuki sanagara ya Tukiakari.

村夜

白居易

霜草蒼蒼蟲切切
村南村北行人絶
獨出門前望野田
月明蕎麥花如雪

村の夜

青白む霜の小草の虫の音に
行く人絶えし村のみち
ひとり門邊にたたずめば
蕎麥の花雪さながらや月明り

KIKU.

Hitoyo Hatusimo Yane ni siroku,
Baseo yaburete Hasu wa orenu.
Higasi no Magaki ni Kiku koso are,
Kogane Akatuki iyoyo kiyoku.

菊花

白居易

一夜新霜著瓦輕
芭蕉新折敗荷傾
耐寒唯有東籬菊
金粟花開曉更清

菊

ひと夜初霜屋根に白く
芭蕉破れて蓮は折れぬ
東の籬に菊こそあれ
黄金曉いよよ淸く

NAKAAKI NO TUKI WO NAGAMETE.

Niwatuti siromi Karasu wa Ki ni tomarite,
Oto naki Tuyu ni uruou Hanamokusei,
Hito mina aogu koyoi no Tuki sayakani,
Taga Ie Aki no Omoi ni taenu narame.

中秋望月

王建

中庭地白樹栖鴉
零露無聲濕桂花
今夜月明人盡望
不知秋思在誰家

仲秋の月を眺めて

庭つち白み鴉は木に止りて
音なき露にうるほふはなもくせい
人みな仰ぐ今宵の月さやかに
たが家秋の思ひにたへぬならめ

AKI NO OMOI.

Aki wa sabisi to ii nasedo,
Haru no Asita ni masarubesi.
Aozora takaki Turu itiwa,
Waga Omoi sae amagakuru.

秋思

自古逢秋悲寂寥
我言秋日勝春朝
晴空一鶴排雲上
便引詩情到碧霄

劉禹錫

秋の思

秋はさびしといひなせど
春のあしたにまさるべし
青空高き鶴いち羽
わがおもひさへ天翔る

AKIMATURI.

Ine Ooawa no Aki wa koete,
Butagoya mo Toya mo nakaba sasitu.
Kuwakage nanameni Utage hatete,
Eibito tasuketu mina kaerinu.

社日

鵞湖山下稻粱肥
豚柵雞塒半掩扉
桑柘影斜秋社散
家家扶得醉人歸

王駕

秋祭り

稲大粟の秋は肥えて
豚小屋も鶏舎も半ばさしつ
桑影斜にうたげはてて
酔人助けつみな歸りぬ

AKIGOKORO.

Tana ni Uri mogu Niwatukuri,
Kaki ni Hana tumu Muraotome,
Natu wa Miyako ni nao nokore,
Aki no Hikari wa No no Ie ni.

秋懷

園丁傍架摘黄瓜
村女沿籬采碧花
城市尚餘三伏熱
秋光先到野人家

陸游

秋心

棚に瓜もぐ庭作り
垣に花つむ村乙女
夏は都になほ殘れ
秋の光は野の家に

OMOIDE.

Kisi no Takadono tada hitori,
Tukikage wa Midu ni Midu wa Sora ni,
Yorisoite misi Hito wa iduko,
Nagame wa Kozo wo sanagarani.

江樓書感

獨上江樓思渺然
月光如水水連天
同來翫月人何處
風景依稀似去年

趙嘏

思ひ出

岸の高樓ただひとり
月影は水に水は空に
よりそひて見し人はいづこ
眺めは去年をさながらに

YAMA NO AKI NO YO.

Yokage Akikage Obasima ni,
Mi ni simu Kaze no Tuyukesa ya,
Aogiri tateru Itabisasi,
Kôrogi nakite Tuki samusi.

山間秋夜

夜色秋光共一闌
飽收風露入脾肝
虛檐立盡梧桐影
絡緯數聲山月寒

眞山民

山の秋の夜

夜影秋かげおばしまに
身にしむ風の露けさや
あを桐立てる板びさし
こほろぎなきて月寒し

INAKA NO AKI.

Akatuki Hatusimo Aki wo hukami,
Iroduku Hayasi wa tada kurenai.
Me ni koso medura ya Mi no Tatibana,
Masaono Hagakure Kogane sawani.

秋日田園雜興

新霜徹曉報秋深
染盡青林作纈林
惟有橘園風景異
碧叢叢裏萬黃金

范成大

田舍の秋

あかつき初霜秋を深み
色づく林はただ紅
目にこそめづらや實の橘
眞青の葉がくれ黃金さわに

AMAAGARI.

Nisikaze hukiharau ya Hitohiragumo,
Minemine Amage no Ato mo azayakani,
Aki no Hikari no Kiyosa wa Midu no goto,
Misora no Midori ahururu Siba no Toboso.

雨後

張著

西風無意嫪纖雲
掃盡千峰雨脚痕
一片秋光淸似水
家家空翠滿柴門

雨上り

西風吹き拂ふや一片雲
峰みね雨氣のあともあざやかに
秋の光の淸さは水のごと
み空の綠あふるる柴のとぼそ

AKI NO OMOI.

Nisikaze samuku Kari otite,
Hasu hiebieto Hana tirinu.
Omoi wabisiki Kotogoto wo
Yo hitoyo utae Kirigirisu.

秋思

孫存吾

雁落西風字沈沈
嫩凉偸入藕花心
眼前多少關心事
付與寒蛩徹夜吟

秋の思ひ

西風寒く雁落ちて
はす冷えびえと花散りぬ
思わびしき事事を
夜ひと夜歌へきりぎりす

KAIHAKUTEI NI DAISU.

Midu wa kemuru maeni usironi,
Sitositoto Amage no Yozora,
Hanamo no Kaori wo Sode ni simete,
Suzusisa wa Ukine no Sagi ni ataemasi.

題介白亭

遶亭三面水如煙
好是霏微釀雨天
滿袖蘋花將不去
夜凉輸與鷺鷥眠

嚴遂成

介白亭に題す

水は煙る前に後に
しとしとと雨氣のよぞら
花藻の香りを袖にしめて
凉しさは浮寝の鷺にあたへまし

HAE WO UTAU.

Akikaze Awase no Sode ni simite,
Otiba wa harahara Toboso utu ni,
Sabae ya itu made ikuru naran,
Yûhi no Nukumi wo oi yuku nari.

詠蠅

徒覺金風透袷衣
紛紛落葉擁荊扉
青蠅能得多時活
猶逐斜陽暖處飛

汪琬

蠅を詠ふ

秋風袷の袖にしみて
落葉ははらはら扉うつに
蒼蠅やいつまで生くるならむ
夕日のぬくみを追ひ行くなり

HATUAKI NO YÔSUZU.

Hata oru Musi no Ne Tuki wa nisi e,
Makura ni suzusiki Kosame no Kaze,
Sirakami keutoki Hosiaizora,
Gibosyu no Hana koso Kame ni kaore.

初秋夜涼

小虫機杼月西廂
風雨纔分半枕涼
白髪自疎河漢夢
一瓶秋水玉簪香

仲尹

初秋の夜涼

機織る虫の音月は西へ
枕に涼しき小雨の風
白髪けうとき星あひ空
ぎぼしゆの花こそ瓶にかをれ

TUMA NO NAGEKI.

Miyako no Sora no Tuki saete,
Kinuta zo hibiku Iegoto ni,
Tada huki-sikiru Akikaze no
Sekidi ni kayou uki Omoi,
Itu ka wa Ada wo uti-hatete,
Kaeru waga Se wo mukaemasi.

子夜呉歌（一四）

長安一片月
萬戸擣衣聲
秋風吹不盡
總是玉關情
何日平胡虜
良人罷遠征

李白

TOMO TO YADORITE.

Sosogi-saru Titose no Urei.
Nomi-tukusu Momotubo no Sake.
Koyoi kamo katari-akanaku,
Inegateni aogu Tukikage.
Ei-husu ya Hito naki Yama ni,
Ametuti zo warera ga Sitone.

友人會宿 (一五)

滌蕩千古愁
留連百壺飲
良宵宜且談
皓月未能寢
醉來臥空山
天地卽衾枕

李白

TUKI NO WAKARE.

Motiduki no Akizora takaku,
Wabibito wa Yo wo tada hitori.
Yumihari to misi Ma mo arazu,
Utiwa nasi tatimati marosi.
Tuyu hureba Hikari sayakeku,
Kaze hukeba Kage mo samukesi.
Usumono no Sode wo awasete,
Mune ni semaru Wakare wa turasi.

和康五望月有懷 (一六)

明月高秋迴
愁人獨夜看
暫將弓並曲
翻與扇俱團
露濯清輝苦
風飄素影寒
羅衣此一鑒
頓使別離難

陳子昂

MADAKINI OKITE.

Yume samete Sagiri harukani,
Husuma samumi Mi wa mama narazu.
Kane no Oto Makura ni akete,
Tuki no Kage Osu ni Aki meku.
Kari sugite Yamakawa wa oi,
Musi nakite Kusaki zo ureu.
Kamuri tadaseba Hito koso warae,
Hutatuki mo Kusi wo kuwaezu.

曉起（一七）

文天祥

夢破風烟迥
衾寒不自由
鐘聲到枕曙
月影入簾秋
雁過江山老
蛩吟艸樹愁
整冠人共笑
兩月不梳頭

YAMABE NO TUKI.

Ware wa medu Yamabe no Tuki wo,
Kagayakani Hayasi ni kakaru.
Hitorii wo awaremu narasi,
Nagaruru Kage Eri ni koboruru.
Waga Kokoro Tuki ni nitari ya,
Tuki mo waga Kokoro no gotoku,
Aiterasu Tuki to Kokoro to,
Sugasiyo wo tomoni tadunen.

山中月（一八）

眞山民

我愛山中月
烱然掛疎林
爲憐幽獨人
流光散衣襟
我心本如月
月亦如我心
心月兩相照
清夜長相尋

YORU SAIZI NI YADORU.

E no Tuki wa Aki no Tamoto ni,
Tôdera no Toboso tatakeba,
Neguradori Hito ni odoroki,
Simobe okinu Sô ya kaeru to.
Watadono ni Kane no Ne tukite,
Bô no Tomosi kasukani wa miyu.
Tabiyakata nasi to ni arane,
Sidukesa wo tomoni wakatan.

夜投西寺（一九）

江月上秋衣
來敲遠寺扉
栖禽驚客至
睡僕訝僧歸
鐘度行廊盡
燈留俗院微
非無招旅館
禪寂願相依

高青邱

AKI NO HI NI.

Itoma aru Mi wa nobiyakani,
Me samureba Mado no Hi akasi.
Mono mina wa Tokoro wo e tutu,
Tuki-hana wo Hito to tanosimu.
Miti wa kayou Ametuti no soto,
Kaze-kumo ni Kokoro wa tadayou.
Madusisa mo Tomi mo nani sen,
Masurao ya kakute zo arikeru.

秋日偶成（二〇）

閑來無事不從容
睡覺東窓日已紅
萬物靜觀皆自得
四時佳興與人同
道通天地有形外
思入風雲變態中
富貴不淫貧賤樂
男兒到此是豪雄

程明道

OTIBA.

Sarasara mata sarasara,
Kikedomo kazcegatasi,
Warabe wa cdoroki same,
Madobe no Ame wo tugesi.

落葉

蕭蕭復蕭蕭
可聽不可數
山童睡忽驚
報道窓前雨

僧清恆

落葉

さらさらまたさらさら
聞けども數へ難し
童は驚き覺め
窓邊の雨を告げし

UMI NO TAKADONO NO KABE NI KAKU.

Midu otite Yamakage samusi,
Tanosıkumo Kusa wa humisi ka.
Obasima no Ake sae kutinu,
Obasima no masiteya Hito wa.

湖樓題壁

水落山寒處
盈盈記踏春
朱闌今已朽
何況倚闌人

厲鶚

湖の高樓の壁に書く

水落ちて山かげ寒し
樂しくも草は踏みしか
おばしまの朱さへ朽ちぬ
おばしまのましてや人は

MIYUKI NI TADORU HITO WO MiTE.

Hitokage ni Inu wa hoe tutu,
Yuki hukami Mura wa iduko zo.
Sakamise wo tomete yuku ran,
Somabasi ni Mino no samukesa.

密雪望行人

人行犬寒吠
密雪迷村影
欲扣酒家扉
山橋一蓑冷

謝芳連

深雪にたどる人を見て

人影に犬は吠えつつ
雪深み村は何處ぞ
酒店をとめて行くらむ
そま橋に蓑の寒けさ

OOTUGOMORI.

Hatago no Tomosi inegateni,
Mono sabisisa wa Tabigokoro,
Koyoi tisatono Hurusato ya,
Asu Sirakami no Tosi hitotu.

除夜作

旅館寒燈獨不眠
客心何事轉凄然
故郷今夜思千里
霜鬢明朝又一年

高適

大晦日

旅館のともしいねがてに
物さびしさは旅心
今宵千里の故郷や
あす白髪の年ひとつ

SIMO NO KANE.

Nagayo no Sora wa siramite,
Hurudera Kane no samukesa,
Hibiki wa Tuki to sidumite,
Nagori zo Simo ni nokoreru.
Waraya no Tomosi kuraki ni,
Madobe no Yume wa takenawa,
Taetewa tuduku Omoi ni,
Satoreba Kokoro yasura ya.

霜鐘（二）

長夜天將曉
鐘鳴蕭寺寒
響沈和月落
聲遠帶霜殘
老屋燈初暗
聞窓夢已闌
誰將斷續意
靜證道心安

宋邦綏

YOAKE NO OOYUKI.

Yo wa siramu kayano Nokiba ya,
Hioke idakite Uta omou.
Noki meguru Siduku sidukani,
Toboso akureba Yuki hukasi.
Oborooboro Magaki magirete,
Sora niwa Mine no Kage miezu.
Sake kai ni iden to sureba,
Humido mo arazu maeno Tanima wa.

曉起大雪（三）

芽檐明夜色
晏起擁爐吟
遠屋寒流靜
開門雪正深
微茫辨籬落
蒼翠失雲岑
趁欲沽郿酒
前溪不可尋

程夢湘

KAGOTO.

Tamano Osu maku Taoyame ga
Mayune mo hisomu Komorii ni,
Namida no Ato no simereru wa
Tare wo Urami no Kokoro ka ya.

怨情

美人捲珠簾
深坐嚬蛾眉
但見涙痕濕
不知心恨誰

かごと

玉のをす巻くたをやめが
眉ねもひそむこもり居に
泪の跡の濕れるは
誰を恨みの心かや

李白

HIGASIYAMA WO OMOU.

Higasiyama hisani mukawazu,
Hanaubara ikutabi sakisi.
Sirakumo wa onoduto kiete,
Tuki kiyomi taga Ya wo terasu.

懷東山

不向東山久
薔薇幾度花
白雲還自散
明月落誰家

東山を懷ふ

ひがしやま久に向はず
花うばら幾度さきし
白雲はおのづと消えて
月清み誰が家を照す

李白

SAIKOOSYUU NI WAKARURU TOTE.

Koma tomete kimi to wakaruru
Hori no ue,
Yama wa sayakesi,
Hitori to omou ni.

留別崔興宗

駐馬欲分襟
清寒御溝上
前山景氣佳
獨往還惆悵

王維

崔興宗に別るるとて

駒とめて君と別るる
ほりの上
山はさやけし
ひとりとおもふに

SIKA NO SAKU.

Yama siduka Hito miezu,
Hitogoe zo kikoe kuru,
Irihikage Mori ni kakurete,
Aogoke wo honoterasu.

鹿柴

空山不見人
但聞人語響
返景入深林
復照青苔上

王維

鹿のさく

山靜か人見えず
人聲ぞ聞え來る
入日影森に隱れて
青苔をほの照らす

SYOOTEIEKI NI YADORITE.

Umayadi no Yo wa hukete,
Hurusato wo nagamureba,
Tukikage ni miyuru mono,
Usio nomi honozirosi.

宿樟亭驛

夜半樟亭驛
愁人起望鄉
月明何所見
潮水白茫茫

白居易

樟亭驛に宿りて

うまやぢの夜はふけて
ふるさとを眺むれば
月影に見ゆるもの
潮のみほの白し

KAGAMI NI SIRAGA WO UTUSITE,

Aogumo ni Omoi wa kaketu,
Sirakami no Asi mo yoroyoro,
Tada hitori Kagami ni mukai,
Awaremiau Kage to Katati to.

照鏡見白髮

宿昔青雲志
蹉跎白髮年
誰知明鏡裏
形影自相憐

張九齡

鏡に白髮をうつして

青雲に思ひはかけつ
白髮のあしもよろよろ
ただ一人鏡に向ひ
憐み合ふ影と形と

INZYA WO TADUNETE AWAZU

Matukage no Warabe ni toeba,
Si no Kimi wa Kusuri wo tori ni,
Kono Yama no uti niwa masedo,
Kumo hukamı tadunen Yosi nasi.

尋隱者不遇

賈島

松下問童子
言師採藥去
只在此山中
雲深不知處

隱者を尋ねて逢はず

松かげの童に問へば
師の君は藥を採りに
この山の中にはませど
雲深み尋ねむよしなし

SAKE WO SUSUMU.

Kimi ageyo Kogane-sakaduki,
Naminamito ina to na ii so,
Hana sakeba Amekaze sigeku,
Hitonoyo wa tada Wakare nomi.

勸酒

于武陵

勸君金屈卮
滿酌不須辭
花發多風雨
人生足別離

酒をすすむ

君あげよ黃金盃
なみなみといなとな言ひそ
花咲けば雨風滋く
人の世はただ別れのみ

YAMA NO IE.

Yama no Ie tada siduka,
Asayû ni Kumo wa kite,
Niwa munasi nani ka to mireba,
Aogoke ni teru Yûhi.

山館

山館長寂寂
閑雲朝夕來
空庭復何有
落日照青苔

皇甫冉

山の家

山の家ただ靜か
朝夕に雲は來て
庭空し何かと見れば
青苔に照る夕日

YAMABE NITE OSIEGO NI SIMESU.

Tani no Nagare ni Mi wo okeba,
Nagare mo siduka waga Kokoro,
Omowanu Tuki wa Yama no ueni,
Matukage mabara Sodetamoto.

山中示諸生

溪邊坐流水
水流心共閑
不知山月上
松影落衣斑

王陽明

山邊にて教子に示す

谷の流に身を置けば
流も靜かわが心
思はぬ月は山の上に
松影まばら袖たもと

MODAE NO UTA.

Hina wo kakaeta Sirogarasu,
Yoppite naite Yo wo akasu.
Tubasa ga dekirya itu no mani,
Nisi e Higasi e tonde yuku.

懊憹歌

白鴉養雛時
夜夜啼達曙
如何羽翼成
各自東西去

劉基

悶えの歌

雛をかかへた白がらす
夜つぴて鳴いて夜を明かす
翼が出來りやいつのまに
西へ東へ飛んでゆく

HUDAZI.

Yama no Kubomi Tera ari,
Matu to Take to sayasaya,
Huru-mihotoke modaseba,
Masimidu nomi katareru.

普陀寺

一寺藏山凹
松竹淡如許
古佛坐無言
流泉代作語

袁枚

普陀寺

山のくぼみ寺あり
松と竹とさやさや
古み佛もだせば
眞淸水のみ語れる

E WO WATARU.

Aoyama wa Hurubito no goto,
E no Midu wa Umaki ni nitari,
Kyô kokoni hutatabi aite,
Yoki Tomo to aguru Sakaduki.

渡江

青山如故人
江水似美酒
今日重相逢
把酒對良友

文點

江を渡る

青山は故人のごと
江の水は美酒に似たり
今日ここに再び逢ひて
良き友とあぐるさかづき

DAI SIRAZU.

Hito no Yo no Nageki wa onazi,
Momotose wo tare ka tamotisi.
Aware aware Yangtze no Nagare,
Tadusaete watarisi mono wo.

逸題

此恨人人有
百年能幾人
痛哉長江水
同渡不同歸

辜鴻銘

題しらず

人の世の嘆きは同じ
もも年を誰か保ちし
あはれあはれやんつえの流れ
たづさへて渡りしものを

HURUSATO NI KAERITE.

Wakaki Hi Ie wo hanarete oite kaereba,
Hurusato no Namari kawarane Kami wa sirosi,
Kora ni si aedo misireru Kao mo nakute,
Waraite tou ya Marebito iduko yori kisi.

囘郷偶書

少小離家老大囘
郷音無改鬢毛摧
兒童相見不相識
笑問客從何處來

賀知章

故郷に歸りて

若き日家を離れて老いて歸れば
故郷のなまり變らね髮は白し
子等にし逢へど見知れる顏もなくて
笑ひて問ふやまれ人いづこより來し

MIYAKOIRI NO TUKAI NI AITE.

Higasi to bakari Hurusato yo,
Namida kawakanu Tabigoromo,
Aedo Hude naki Uma no ue,
Tutaeteyo kimi tutuganasi to.

逢入京使

故園東望路漫漫
双袖龍鐘涙不乾
馬上相逢無紙筆
憑君傳語報平安

岑参

都入りの使ひに逢ひて

東とばかり故郷よ
涙かはかぬ旅衣
逢へど筆なき馬の上
傳へてよ君つつがなしと

KO NI YOSURU.

Ie no uti mina tutuganasi,
Hatatumono mo Kura ni amareri,
Ieduto wa okuru mo yosi na,
Tutome hagemi mukuiyo Miyo ni.

寄子

家內平安報爾知
田園歲入有餘資
絲毫不用南中物
好作淸官答聖時

徐氏（耽庭柏母）

子に寄する

家の內皆つつがなし
はたつものもくらにあまれり
いへづとはおくるもよしな
つとめはげみ報ひよ御世に

ASAHI.

Asahikage madu sasu Hikari,
Yama mata Yama Hi no waku gotosi,
Ositeru ya Ame no Hitadi wo,
Hosikudu mo Tuki mo Kage nasi.

旭日

太陽初出光赫赫
千山萬山如火發
一輪頃刻上天衢
逐退群星與殘月

宋太祖

朝日

朝日影まづ射す光
山また山火の湧くごとし
おし照るや天の直路を
星くづも月も影なし

ASADATI.

Mi wa oite Na koso motomene,
Yaseuma ni Nagadi wa tadore,
Akatuki no Mura no Tomosibi,
Yomosugara Humi yomu ya tare.

曉行

老去功名意轉疎
獨騎瘦馬取長途
孤村到曉猶燈火
知有人家夜讀書

晁沖之

朝立

身は老いて名こそ求めね
瘦馬に長路はたどれ
あかつきの村の灯
夜もすがらふみ讀むや誰

RAYUUKEI NI OKURU.

Itoma aru Mi wa yami-husite,
Tadune-kuru Hito koso arane,
Kadobe ni haru Suzume no Ami ya,
Madusisa wa Utabito no tune.

贈羅友卿

閑中日月病中身
寂寞相求有幾人
莫怪門前可羅雀
詩家所得是清貧

元好問

羅友卿に贈る

いとまある身は病みふして
尋ねくる人こそあらね
門邊にはる雀のあみや
貧しさはうたびとのつね

KUTIZUSAMI.

Kawan to sureba Yama mo Tani mo Kane Yô nasi,
Kokoro si umeba Makura takaku Sirakumo no heni,
Waga Yo no Negai konohokani hitotu mo arazu,
Tanima ni nomitu Oka ni sumitu hatatose nari.

口占

呉偉業

欲買溪山不用錢
倦來高枕白雲邊
吾生此外無他願
飲谷棲邱二十年

口ずさみ

買はむとすれば山も溪も金用なし
心し倦めば枕高く白雲の邊に
わが世の願ひこの他に一つもあらず
谷間に飲みつ丘に住みつはた年なり

KOKYUU

Kaeri ososa yo Yûgarasu,
Hesaki ni kakaru Tuki no Mayu,
Osu makiaguru Eizame ya,
Takadono ni Hi wa tomori tutu.

虎邱絶句

趙翼

莫鳥啼處客歸遲
畫舫前頭月似眉
殘醉倚舷簾半捲
家家水閣上燈時

虎邱

歸りおそさよ夕がらす
へさきにかかる月の眉
をす捲き上ぐる醉ざめや
高殿に灯はともりつつ

AME NI SYUUSYUU WO SUGITE.

Takadono Kage sasu Miduumi Sora wa aoku,
Ama ga Ya otikoti Kisibe no Higasi Nisi ni,
Hitokoe Hunauta yuku wa iduko naran,
Kogiiru oboroni Kosame no kemuru naka wo.

雨中過秀州

李紳

樓影湖波枕碧空
魚莊蟹舍岸西東
一聲欸乃知何處
掉入迷濛煙雨中

雨に秀州を過ぎて

高殿影さす湖空は青く
あまが家をちこち岸邊の東西に
一聲船歌行くは何處ならむ
漕ぎ入る朧ろに小雨の烟る中を

KAWABUNE.

Kimi no Mihune wa E ni tomari.
Ware wa sumaeri Takadono ni.
Asa wa Asa yori Yo wa Yo made.
Taezu mikawasu sita to ue.
Mikawasi tutumo aikanuru
Namikaze koso wa turenakere.

江南船（二三）

郎船江下泊
妾家樓上住
朝朝暮暮間
上下兩相顧
相顧不相親
風波愁殺人

戴復古

TOMO WO OKURU.

Yama aosi Kita no Kuruwa ni,
Midu sirosi Hingasi no Siro.
Koko ni site iza wakarure ya,
Kadimakura Yukute zo haruka.
Tabigokoro Ukikumo no goto,
Tomo no Nasake Irihi ni nitari.
Te wo hurite ima wa to sareba,
Urasabisi Koma no Inanaki.

送友人（二四）

李白

青山横北郭
白水遶東城
此地一爲別
孤蓬萬里征
浮雲遊子意
落日故人情
揮手自玆去
蕭蕭班馬鳴

WAKARE.

Masurao ya Namida wa aredo,
Sosogazi wo Wakare no tokini.
Turugitati torite Sake kume,
Tabibito no Kaobase wa sezi.
Hebi Mamusi yosi Te wo sasaba,
Takeora wa Ude mo osimazi.
Tada omou waga Na no Homare,
Wakare woba nani nagekubeki.

別離（二五）

陸龜蒙

丈夫非無淚
不灑別離間
仗劍對樽酒
恥爲遊子顏
蝮蛇一螫手
壯士疾解腕
所思在功名
離別何足歎

KOTO NI KANZITE.

Tosi wakaku nani ka nasiken,
Oite nao Koto mo hatasazu.
Hito wa iu kare wa siniki to,
Ware mo hata itou Inoti zo.
Kuni hitotu motinubeki Mi wo,
Adasiyo ni nadumu Kokoro yo.
Momotose ya hito-warai naru,
Na wa munasi Yasukesa mo naku.

感事 (二六)

壯事本無取
老謀何所成
人皆傳已死
吾亦厭餘生
潦倒封侯骨
淹留混俗情
百年堪一笑
辛苦惜虛名

元好問

YAMADERA NI ASOBU.

Yuki yukite yukite tatazumu,
Yuki-tuku ya Sirakumo no naka.
Kyaku miredo Omoi kiyorani,
Sô ni aeba Kokoro zo siduka.
Masimidu wa Tani ni wakarete,
Komiti ikutu Yama ni tuduku ka.
Takamusiro koko no Mitera ni,
Asobamasi hutuka hutayosa.

遊山寺 (二七)

行行行復止
行到白雲間
見客意不俗
逢僧心便閑
細泉分別澗
小徑入他山
擬借禪房榻
追遊信宿還

李材

KEIITUZIN NI YOSU.

Urayamasi Ukiyo wo yosoni,
Kokoro seku mono mo naki kimi.
Hedatureba Hito mo tadunezu,
Tani hukami Tori no Tobikai.
Hasu no Ha ni husau Koromo ya.
Nae koete Ii ni kanaeri.
Kitewa saru Usio no hotori,
Ware mo mata iza kaeramasi.

寄刑逸人 （二八）

鄭常

美君無外事
日與世情違
地僻人難到
溪深鳥自飛
儒衣荷葉老
野飯藥苗肥
若問湖邊意
而今憶共歸

KANASIMU UTA.

Tabidi kogosi,
Hito mo Uma mo uenu.
Tomite oin yo wa madusi tomo waka-
karasi,
Umasi asobu yo wa uraburete kaerinan.
Ukikumo ya Kaze no manimani,
Kusa mo Ki mo mina karehatenu.
Sora aogi Uta kanasi,
Namida hatenaku.

悲歌 （二九）

高青邱

征途嶮巇
人乏馬飢
富老不及貧少
美游不及惡歸
浮雲隨風零落四野
仰天悲歌泣數行下

TUMA NO KOTOBA.

Se ari to tare ka iu,
Ware sutete mimakarimasinu.
Tare ka iu Ko nasi to,
Ikiutusi Kakoime no Ko zo.
Ko wa Humi yomi ware wa Asa nai,
Neya sabisi Yoyo no Asadori.
Ko wa Na wo e wa wa totuganeba,
Kakuriyo ni yasurae waga Se ya.

張節婦詞 (三〇)

謠言妾有夫
中路棄妾身先殂
誰言妾無子
側室生兒與夫似
兒讀書妾辟纑
空房夜夜聞啼烏
兒能成名妾不嫁
良人瞑目黄泉下

高青邱

OMOI.

Wakaki yori Otikoti ni yuki,
Sozoro nari ya Yomo ni asobeba,
Miharukasu Ametuti hiromi,
Yamakawa no Hate sae sirazu.
Tori wa tobu Omoi no mamani,
Urasabisi Kigi zo sobiyuru.
Takaki ni tati hurisakemireba,
Inisie ni Kokoro wa itamu.
Tatazumite Kumodi no Sue ni,
Kakeramasi Tubasa mo are ya.

感慨 (三一)

結髮事遠游
逍遙觀四方
天地一何闊
山川杳茫茫
衆鳥各自飛
喬木空蒼涼
登高見萬里
懷古使心傷
竚立望浮雲
安得凌風翔

劉基

Ame otitewa Sora ni noborazu,
Midu koboretewa moto ni kaerazu.
Kimi no Kokoro to waga Mune to,
Nagare wa ituka Nisi-higasi.
Mukasi adenaru Hanahuyô,
Ima wa hakanasi Omoigusa.
Iroka wa asuru kuyasisa yo,
Idure ka Aki ni awade hatubeki.

妾薄命 (三二)

漢帝寵阿嬌
貯之黄金屋
咳唾落九天
隨風生珠玉
寵極愛還歇
妬深情却疎
長門一步地
不肯暫回車
雨落不上天
水覆難再收

HAKANASA.

Kan no Mikado no Irogonomi,
Kogane-takadono Oku hukaku,
Sora no ue yori haku Tuba wa
Kaze no manimani Tama to narinu.
Itosiki Hate no Usunasake,
Netameba iyoyo utomarete,
Mi wa Toraware no Sube mo nasa,
Mikuruma no Oto wa kiki nagara.

君情與妾意
各自東西流
昔日芙蓉花
今成斷腸草
以色事他人
能得幾時好

李白

TUKIYO NI UME NO HANA WO MITE.

Tukikage wa haresi Yuki nare,
Ume no Hana wa kirameku Hosi ka,
Masukagami Kogane marobitu,
Hanabira no Tama no Kaori ya.

月夜見梅花

月耀如晴雪
梅花似照星
可憐金鏡轉
庭上玉房馨

月夜に梅の花を見て

月影は晴れし雪なれ
梅の花はきらめく星か
ます鏡こがねまろびつ
花びらの玉のかをりや。

菅原道眞

HARUYOSI.

Tutomebito kakure-sumu Sato,
Haruyosi to ubemo iikeru.
Mabaragaki Hana saku mamani,
Nobe no Tyô kitewa sari tutu.

春好

吏隱聚成村
蕭然春好處
疎籬不護花
野蝶來還去

春好

つとめ人隱れすむ里
春好しとうべも言ひける
疎らがき花咲くままに
野邊の蝶來ては去りつつ

廣瀨淡窓

SAKURA-NO-MIYA NI ASOBU.

Hana sakeba Hito tudoi,
Hana tireba hitori izu,
Uguisu zo saeduru ya,
Aobakage hukami tutu.

遊櫻祠

花開萬人集
花盡一人無
但見隻黄鳥
綠陰深處呼

廣瀬旭莊

櫻の宮に遊ぶ

花咲けば人集ひ
花散れば一人ゐず
鶯ぞさへづるや
青葉かげ深みつつ

KYAKU WO TODOMU.

Harugasumi mi tomo akameya,
Yamabe niwa Warabi mo koenu.
Sibasi kimi yasurai imase,
Warabe ima Sake kaite kon.

留客

煙霞如是好
前山薇也肥
請君且安坐
童今沽酒歸

釋金龍

客を留む

春がすみ見ともあかめや
山邊には薇も肥えぬ
しばし君やすらひいませ
童いま酒かひて來ん

HARU NO HANAMUKE.

Kaeru ya iduko Haru no Yukue,
Haru ni si tcedo Haru katarazu,
Nagaruru Midu to tiru Hana to,
Sidukani Hito ni somuki saru.

餞春

欲迹春歸處
問春春不語
流水與落花
悠然背人去

松本奎堂

春の餞

歸るやいづこ春のゆくへ
春にし問へど春語らず
流るる水と散る花と
靜かに人に背き去る

HATUHARU NO KUTIZUSAMI.

Haru ososi Haru no Ki no Yurugi mo miezu,
Utagokoro Yuki-simo ni musubore tutu,
Hadukasi ya huku Koti ni waraware mo sen,
Minnami no Ume hitoe madu monosinuru.

新正口號

淑氣未融春尚遲
霜辛雪苦豈言詩
此情愧被東風咲
吟斷江南梅一枝

武田信玄

初春の口ずさみ

春おそし春の氣のゆるぎも見えず
歌ごころ雪霜にむすぼれつつ
恥しや吹く東風に笑はれもせむ
みんなみの梅一枝まづものしぬる

HINATABOKORI.

Waraya no En ni udukumari,
Hikage uraura nemuramasi,
Simo mo toke yuku Harugokoro,
Mi wa Oozora no tadanaka ni.

曝背

曝背茆檐一事無
趁晴宜辨睡工夫
盎然春色冰霜底
坐我渾天大極圖

釋雪村

ひなたぼこり

藁屋の縁にうづくまり
日かげうらうら眠らまし
霜も解けゆく春ごころ
身は大空のただ中に

DAI SIRAZU.

Ayasigumo Hi wa usuduku ni,
Mikuni cmoi Kokoro Ie mo nasi.
Tare ka siru kakaru Yutori wo,
Koma ni miyaru Na no Hanazakari.

逸題

風捲妖雲日欲斜
多難關意不思家
誰知此裏有餘裕
立馬郊原看菜花

山内容堂

題知らず

あやし雲日はうすづくに
みくに思ひ心家も無し
誰か知るかかるゆとりを
駒にみやる菜の花盛

SIRAUO.

Namasu ni semasi siroganeno Ito wa sanzun,
Yotude agureba haturatuto Yuki zo kudakuru,
Tisaki Uo sae meduru rasi Haru no Hikari ni
Hana tiru Nagare hitamukini sakanobori kuru.

白小魚

三寸銀絲好鱠材
擧罾潑剌雪花摧
小魚亦愛春光好
直遡落花流水來

大窪行

白魚

なますにせまし白金の糸は三寸
よつであぐれば潑剌と雪ぞくだくる
小さき魚さへめづるらし春の光に
花散る流れひたむきに遡り來る

YUKUHARU TUMA WO ITAMU.

Tabi no Mi kaeran Kokoro setini,
Harukaze Miyako ni mituki amari,
Omoi mo kakemeya asu no Sirase,
Hokage ni Tuma eno Uta wa kakisi.

暮春傷内

客舍思歸未及期
春風三月滯京師
不知明日訃音到
剪燭猶裁寄內詩

高階春帆

ゆく春妻を傷む

旅の身歸らむ心切に
春風都に三月餘り
思ひもかけめやあすのしらせ
火影に妻への歌は書きし

KOZIMA-TAKANORI GA SAKURA NI SIRUSU DU NI DAISU.

Yama mata Yama naru Kumo wo koete,
Mikosi wa iduko ni kyô wa aware ;
Mino kite sinobu wa Tora no Iwaya,
Hitohuri saguru ka Wani no Huti e ;
Mikuni wo omcedo Mi wa ware nomi,
Hikari wo kaesu mo sabisi Karate ;
Namida ni nizimeru nigyôno Mozi,
Sakura ni sirusite Kckcnoe made.

題兒島高德
書櫻樹圖（三三）

踏破千山萬岳煙
鸞輿今日到何邊
單蓑直入虎狼窟
一匕深探鮫鰐淵
報國丹心嗟獨力
回天事業奈空拳
數行紅涙兩行字
付與櫻花奏九天

齋藤監物

HASU WO TORU UTA.

Midorino Nagisa oritatite,
Tigiri midasesi Osi no Yume,
Mitose no Wakare E no ueni
Hasu toru Toki to mata narinu.

採蓮曲

打起鴛鴦兒
莫教棲綠池
三年江上別
又及採蓮時

新井白石

蓮を採る歌

綠の渚下り立ちて
ちぎり亂せしおしの夢
三年の別れ江の上に
蓮採る時とまたなりぬ

KAERU TOTE.

Itadurani Tosi wa Isodi no
Haru sugite Natu mo Nakaba no Kusa-
goromo,
Haraedo saranu Heya no Sabae ya,
Suzukaze ni hitori nemuran Takamusiro.

海南行

人生五十愧無功
花木春過夏已中
滿室蒼蠅掃難去
起尋禪榻臥清風

細川頼之

歸るとて

徒らに年は五十路の
春過ぎて夏も半ばの草衣
掃へど去らぬ部屋のさばへや
涼風にひとり眠らん竹むしろ

ASA HUKAGAWA WO TATITE.

Tuki otite honobonoto tatu Asakemuri,
Hosikage wo uesitani wakatu Nagahasi,
Sorazamani Hukagawa no Midu wo kuda-
reba,
Husa naru ya Sirakumo no Mio wa hito-
sudi.

早發深川

月落人煙曙色分
長橋一半限星文
連天忽下深川水
直向總州爲白雲

平野玄中

朝深川を發ちて

月落ちてほのぼのと立つ朝煙
星かげを上下に分つ長橋
そらざまに深川の水を下れば
總なるや白雲のみをは一すぢ

水竹佳處 NI DAISU.

Kadobe no Midu ni Take kiyoku,
Kimi ga Iei no Na ni si ou,
Toboso no Yûhi Ame sugite,
Kawasemi ki naku Koromokake.

題水竹佳處

野水浸門脩竹淸
君居想合似佳名
山扉半濕斜陽雨
翡翠時來衣桁啼

釋大愚

水竹佳處に題す

門邊の水に竹淸く
君が家居の名にし負ふ
とぼその夕日雨過ぎて
翡翠來啼く衣かけ

SYOOHEIBASI NO SUZUMI.

Wata nasu Kumo ni Tuki naname,
Yukata ni haramu Kaze suzusi,
Hasi no Yomise no Tomosibi ya,
Aki no Koe uru Kago no Musi.

昌平橋納凉

夏雲擘絮月斜明
細葛含風步步輕
數點篝燈橋外市
籠蟲一擔賣秋聲

野田笛浦

昌平橋の涼み

わたなす雲に月斜め
浴衣にはらむ風凉し
はしの夜店のともしびや
秋の聲賣る籠の虫

KURIGOTO.

Honni omoebe Maruhadaka,
Aa hantosi wa Yume dya Yume dya,
Atui samui mo Kuti no saki,
Satoru Ukiyo no Kaze no suzusisa.

述懐

幸無大過又無功
半歳苦辛一夢中
若使此心忘冷熱
人間何處不清風

清浦奎堂

繰り言

ほんに思へばまるはだか
ああ半年は夢ぢや夢ぢや
暑い寒いも口のさき
さとる浮世の風の涼しさ

TAMAGAWA.

Waga Yo sidukani Tuki maroku,
Ayu wa atarasi Zen no ue,
Nagare wa Tama ka Aikawa wo
Sakanoborisi mo hutamukasi.

玉川

身世茫茫明月圓
香魚此夕上盤鮮
溪流一道碧於玉
不遡藍河二十年

森槐南

玉川

わが世靜かに月圓く
あゆは新し膳の上
流は玉かあい川を
遡りしもふた昔

KUGWATU TOOKA.

Seiryôden no Kozo no Koyoi,
Mune saku Omoi no Aki no Uta ya,
Tamaisi Mikesi wa ima mo kokoni,
Uturiga kasikoku osiitadaku.

九月十日

去年今夜侍清涼
秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此
捧持毎日拜餘香

菅原道眞

九月十日

清涼殿の去年の今宵
胸さく思ひの秋の歌や
賜ひし御衣は今もここに
移り香畏くおしいただく

晴

KUGWATU ZYUUSAN'YA.

Toride no Simo no Aki kiyoku,
Karigane ikutu Tuki hukenu,
Medi haruka nari Noto Etigo,
Omou mo yosiya Hurusatobito.

九月十三夜

霜滿軍營秋氣清
數行過雁月三更
越山併得能州景
遮莫家鄉憶遠征

上杉謙信

九月十三夜

とりでの霜の秋清く
かりがねいくつ月ふけぬ
眼路遙かなり能登越後
思ふもよしやふるさとびと

IE NI KAERITE.

Mihiza no motono Yumegokoti,
Hatu-akikaze no suzusisa ni,
Uresi kanasi no Yogatari ya,
Humi yomu Hima mo nakarikeri.

歸家

重侍膝前如夢寐
秋堂風露早涼初
連宵情話交悲喜
未有工夫到讀書

藤井竹外

家に歸りて

御膝の下の夢心地
初秋風の涼しさに
うれし悲しの夜語りや
ふみ讀む暇もなかりけり

HUSIMI NO MITISUGARA.

Mukasi asobisi Okura no Ike,
Nizyû-gonen no Aki suginu,
Ima mo sawa naru Kisi-yanagi,
Idure ni Hune wa tunagiken.

伏見道中

巨椋湖邊感昔遊
回頭二十五年秋
汀前依舊多楊柳
何樹曾維賞月舟

菅茶山

伏見の道すがら

昔遊びしおくらの池
二十五年の秋過ぎぬ
今もさはなる岸柳
いづれに船はつなぎけむ

OSIEGO NI SIMESU.

Hurusato idete kurusi to ya,
Kokoro no Tomo no Tanomosisa,
Asado no Simo wa Yuki no gotosi,
Midu kumine, Takigi wo zo hirowan wa-
re wa.

示諸生

休道他郷多苦辛
同袍有友自相親
柴扉曉出霜如雪
君汲川流我拾薪

廣瀬淡窓

教へ兒に示す

故郷出でて苦しとや
心の友のたのもしさ
朝戸の霜は雪のごとし
水汲みね薪をぞひろはむ我は

HUYU NO YO HUMI WO YOMU.

Kodati wo komete huru Yuki ni,
Kudatu Yo no Nokiba no Suzu no Oto
mo sezu,
Humi katayosete Me todureba,
Tomosibi ni Omokage tatu ya Mukasibi-
to.

冬夜讀書

雪擁山堂樹影深
檐鈴不動夜沈沈
閑收亂帙思疑義
一穂青燈萬古心

菅茶山

冬の夜書を讀む

木立をこめて降る雪に
くだつ夜の軒端の鈴の音もせず
ふみかたよせて眼閉づれば
ともしびに面影立つや昔びと

ORI NI HURETE.

Ie idete mituki hata yotuki,
Ho ni tutau Namida ikusudi,
Koto subete Yume no gotosi ya,
Takadakato aogu Aozora.

自詠

離家三四月
落涙百千行
萬事皆如夢
時時仰彼蒼

菅原道眞

折にふれて

家出でて三月はた四月
頬につたふ涙いくすぢ
事すべて夢のごとしや
高高と仰ぐ青空

SOZOROGOTO.

Uma hasete Wakasa wa su itu,
Yo osamari Me ni tatu Siraga,
Tamawarisi Oi no Inoti wo
Tanosiku zo okuran ware wa.

遣興吟

馬上青年過
時平白髮多
殘軀天所許
不樂復如何

伊達正宗

そぞろごと

馬はせて若さは過ぎつ
世治り目に立つ白髮
たまはりし老の命を
樂しくぞ送らむわれは

SOZOROGOTO.

Sosiru mono sosiraba sosire,
Warau mono warawaba warae,
Ametuti zo tada ware wo siru,
Hito wa isa sirazu tomo yosi.

•

漫述

謗者任汝謗
嗤者任汝嗤
天公本知我
不覓他人知

佐久間象山

そぞろごと

謗る者謗らばそしれ
笑ふ者笑はば笑へ
天地ぞただ我を知る
人はいさ知らずともよし

HURUKI NI NARAITE.

Ko wo umaba Tama no gotokuni,
Tuma wo motada Hana wo sanagara,
Masurao ya kono Kokorozasi,
Yosodi hete Ie wo kamaezu.

擬古

生子當如玉
娶妻當如花
丈夫天下志
四十未成家

河野羆

古きにならひて

子を生まば玉のごとくに
妻を持たば花をさながら
ますらをやこの志
四十路經て家をかまへず

SAGA NO MITISUGARA.

Hisi toru ya Muraotome,
Kodarai no Hune yurara,
Ike mireba Numa miete,
Hitosudino Kawa mo nasi.

佐嘉道上

村女采菱去
搖搖盤作船
一池還一沼
不見一流川

廣瀨淡窓

佐嘉の道すがら

菱取るや村乙女
小だらひの船ゆらら
池見れば沼見えて
ひと條の川もなし

BEPPU.

Takadono ni Wakareuta yamı,
E no ueni okoru Hunauta,
Kaeribune Kaerimi sureba,
Obasima ni naomo yoru Hito.

別府

樓上離歌歇
江頭欸乃新
歸舟回首處
猶見倚欄人

廣瀨淡窓

別府

高殿に別れ歌やみ
江の上に起る船歌
歸り船かへり見すれば
おばしまになほも倚る人

WAKARE.

Tuma wa yami Ko wa Ue ni naku,
Ebisura wo tikaite utan.
Ikisini no kesa no kono Wakare,
Ametuti zo sirosi tamawan.

訣別

妻臥病床兒泣飢
此心誓擬拂戎夷
今朝死別兼生別
唯有皇天后土知

梅田雲濱

別れ

妻は病み子は飢に泣く
戎夷等を誓ひて討たん
生死の今朝のこの別れ
天地ぞしろし給はむ

KUMO.

Kiri Kemuri hata ya Ame naru.
Sitositoto midare obomeku.
Kaze tatimati huki koso sugure,
Yama tikasi Kumo tati-wataru.

雲

似霧似煙還似雨
霏霏漠漠更紛紛
須臾風起吹將去
去作前山一帶雲

大窪詩佛

雲

霧煙りはたや雨なる
しとしととみだれおぼめく、
風忽ち吹きこそ過ぐれ
山近し雲立ち渡る

YOKOHAMA WO TATITE.

Araratto Yama wa iduko zo,
Sora hitasu Namidi aoao,
Usi Hituzi Inoko mo nosete,
Noa no Hune kokoni ukabu mo.

發横濱舟中

亞刺羅山何處邊
風濤淼漫碧涵天
艙間併載牛羊豕
彷彿千秋諾亞船

成島柳北

横濱を發ちて

亞刺羅山は何處ぞ
空ひたす波路青青
牛羊豕も載せて
諾亞の船ここに浮ぶも

AKAMA GA SEKI.

Siraho hitotu Takanami koete,
Aoumi wo Akama ga Seki e,
Nada watari Nada mo tukureba,
Tinzei no Yama koso mietare.

赤馬關

長風破浪一帆還
碧海遙回赤馬關
三十六灘行欲盡
天邊始見鎭西山

鋑孤山

赤馬ヶ關

白帆ひとつ高波越えて
青海を赤馬ヶ關へ
灘わたり灘も盡くれば
鎭西の山こそ見えたれ

ORI NI HURETE.

Kurusimi ni kitayuru Kokoro,
Kudaketemo Tama to naru Mi zo,
Siru ya ikani waga Ya no Okite,
Kora no tame kawazu Tahata wo.

偶感

幾歴辛苦志始堅
丈夫玉碎耻甎全
我家遺法人知否
不爲兒孫買美田

西鄕南洲

折にふれて

苦しみにきたゆる心
碎けても玉となる身ぞ
知やるいかに我が家のおきて
子等のため買はず田はたを

KABE NI KAKU.

Onoko ware Hurusato idete,
Manabi ezuba sinu tomo kaerazi.
Okutuki ni udumen Hone ka,
Aoyama wa itaru Tokoro ni.

題壁

男兒立志出鄕關
學若無成死不還
埋骨豈惟墳墓地
人間到處有青山

釋月照

壁に書く

をの子われ故里出でて
學び得ずば死ぬとも歸らじ
おくつきに埋めん骨か
青山は至るところに

DAI SIRAZU.

Emisira no Kegare harau to,
Ima wa aware Toraware,
Mayonaka Ame wa sitosito,
Yume koso mayoe Arinare.

逸題

欲掃胡塵盛本邦
一朝蹉跌臥幽窓
可憐半夜蕭蕭雨
殘夢猶迷鳴綠江

江藤新平

題知らず

蝦夷の汚れ掃ふと
今はあはれ捕はれ
眞夜中雨はしとしと
夢こそ迷へありなれ

HUZI NO YAMA.

Hingasi no Umi no Midu moti
Sosogi-idasu Matama no Hatisu.
Tuti ni humu Kuni wa mikuni zo,
Sora ni hiraku Hana koso yahira.
Kumo Kasumi Humoto ni imusi,
Hi mo Tuki mo Mine ni kakarazu.
Tagui naki mono nimo aru kamo,
Yama no Yama Huzi no Takane wa.

詠富士山（三四）

誰將東海水
濯出玉芙蓉
蟠地三州盡
插天八葉重
雲霞蒸大麓
日月避中峰
獨立原無競
自爲衆嶽宗

柴栗山

AMAKUSA NO NADA NI HUNAGAKARI SITE.

Kumo ka Yama ka Go ka Etu ka,
Ao hitosudino Midu ya Sora.
Amakusa no Oki ni Hune hatete,
Toma no Kemuri no Yûdukuhi.
Uo koso odore kasiko Namima,
Kirameku Kinsei Tuki sanagara.

泊天草洋 (三五)

雲耶山耶呉耶越
水天髣髴青一髪
萬里泊舟天草洋
煙横蓬窓日漸没
瞥見大魚波間跳
太白當船明似月

頼山陽

HEKO NO UTA.

Suso wa Sune made,
Sode wa Ude.
Kosi no Turugi wa Tetu mo tatu.
Hito ga sawareba Hito wo kiri,
Uma ga sawareba Uma wo kiru.
Wakasa wo tikau Heko-nakama.
Kita no Kyakuzin kuru naraba,
Ensyo Sakana ni Tama Esyaku,
Sore wo kikazuni kuru naraba,
Kubi ni Katana wo Hikidemono.

兵兒歌 (三六)

衣至骭
袖至腕
腰間秋水鐵可斷
人觸斬人
馬觸斬馬
十八結交健兒社
北客能來何以酬
彈丸硝藥是膳羞
客猶不屬饜
好以寶刀加渠頭

頼山陽

SUMERAGI NO UTA.

Ametuti no hirakesi Toki yu
Tokosieto tutawaru Miidu,
Mikado niwa Udi Kabane nasi,
Hisakatano Amatu-mikado zo.
Sumeragi wa Hi Tuki no gotoku,
Yoroduyo ni Uturoi arazu.
Syû no Toku takasi to iedo,
Yaotose wo wadukani hetari.
Sin to nari Kan to nari tutu,
Hutatitose ima ni oyobinu.
Sono Ma nimo Udi wa kawarite,
Kawarinu to mireba Ato nasi.
Utinogu Hi-iduru Kuni wa
Yoyo tugitugi Misakae no kasikoku aru kamo.

皇統歌（三七）

天地開闢來
大統長相傳
天子無姓氏
正知姓是天
天皇如日月
萬古無變遷
誰道周德盛
劣能八百年
爲嬴爲劉後
至今已二千
其間幾姓氏
相代互忽焉
如何日出國
相傳自綿綿

大窪行

（一）旅人の歌

母が縫ひます御手のいと
着るもかしこし旅衣
縫目もいとどこまやかに
歸るはいつぞおぼつかな
小草の心いかでわが
春の惠みに報ゆべき

孟郊

（二）春の眺め

國破れて山河はあり
春なれや城邊のみどり
花みれば涙しとゞに
鳥啼けば心驚く

のろしの火三月絶えせず
ちへに戀しふるさとの文
白かみはいよよ短く
かざしさへさしもかねつる

杜甫

（三）春の夜雨を喜ぶ

をりからや雨しとしとと
春心ときめくならし
風まじり日はたそがれて
ぬれ色のおとも朧ろに
野の小路雲にあやなく
河船の火ぞただあかき
朝見れば紅ぬれて
花重し錦のみやこ

杜甫

（四）夜左氏の家の宴に

ざわめく林月落ちて
袂しとどに琴張れば
せせらぎ暗き花小徑
軒端きらめく星影や
灯はあかき文の上
盃深き劍太刀
うたふで置けば船歌の
小船うけにし戀しもわれは

杜甫

（五）古寺の後

あけぼののくれば古寺

朝日ぞ梢照らせる
小徑はいよよ細みて
庫裡には花も木深く
山かげ鳥はよころび
あをぶち人はなごみぬ
邊りはただに靜かに
うち鐘一つきこゆる

常　健

（六）　春の夜友に別る

しろがねのあかし燈青く
敷物にはゆる黄金の樽
離れのひとまに琴柱たてて
別れゆく道のはても知らず
月影はおぼろ梢高み

あかつきは近し河ぞ白む
今はとて去れば都いづこ
いつかまたここに君とあはむ

陳子昂

（七）　初　春

殘んの寒さ雪消えて
俄にぬくむうららけさ
年新たなる人ごころ
春よみがへる天地や
靑む柳のうす煙
跡あざやけき燒野ぐさ
春はあまねきそよ風の
わが門邊にも吹き通ふかな

眞山民

（八） 曉山を行く

かど出でてともなふはたれ
藤の杖つきつつぞゆく
山みちは一里また二里
あかつきの鶯の聲
峰峰は見えてはかくれ
朝日影晴れては曇る
いづこならむ御寺のかたは
鐘澄めり林へだてて

眞山民

（九） かくれ居

賤しきも高きもあれど
門出づれば皆よすぎなる

ただ一人ものに引かれず
かくれ居の心にひたる
しとど雨夜の間に過ぎて
春草の生ふるも知らず
山青みあけぼのさせば
小鳥らは家めぐりなく
ある時は聖にもあひ
ある時は杣とつれゆく
愚かなる身はすべもなし
世の幸をうとむならなく

韋應物

（一〇） 客を迎へて

南も北も春の水や
日ごとに來たるは鷗の群

とはねば掃はず花の小徑
枝折戸けふこそ君に開け
さかなはひと品市を遠み
まづしきながらのもろみをくめ
隣の翁と飮むと言はば
まばらの垣越し來よと呼ばめ

杜甫

（二）園の梅

花みな散りてただひとり
園の風情を集めたり
影ぞあやなす水淺み
香やはかくるる夕月夜
とまりまどへる霜の鳥
蝶は心をみだすらむ

口ずさみつつさまよへば
檀板も酒も用もなし

林和靖

（三）「さつきの雨は今晴れて」の歌

野菜畠雨いま晴れて
野邊に滿つる若葉の曇り
沼の波軒端にはえて
雲斂まり遠山青し
雛燕水飛びつかれ
花の蝶夢は覺めたり
青嵐田面ゆたけく
駒止めて聞く歌もめづらし

李文淵

(1.) 日本式なれば

書く	kak-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
汲む	kum-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
押す	os-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
立つ	tat-u,	-anai,	-i,	-e.	-ô

ヘボン式なれば

kak-u,	ana-i,	-i,	-e,	-ô
kum-u,	-anai,	-i,	-e,	-ô
os-u,	-anai,	-*h*i,	-e,	-ô
ta-*tsu*,	-*t*anai,	-*ch*i,	-*t*e,	-*t*ô

(2.) 日本式なれば

*T*ama	*t*ikai	*T*ure
Aka*d*ama	te*d*ikai	Miti*d*ure

ヘボン式なれば

*T*ama	*ch*ikai	*ts*ure
Aka*d*ama	te*j*ikai	michi*z*ure

日本式は t が d になるといふ規則一つで盡きてゐるが、ヘボン式ではそれが三通りの變化になる。このやうに日本式の方が簡單になるのは、決して偶然のことではなくて、それが日本語の性質に協つてゐるからである。

3. 動詞の音便變化・俗語の音便變化に kakeba, kumeba, oseba, tateba, などをつめて kakyâ, kumyâ, osyâ, tatyâ といふことがある。日本式で見れば、それは eba が yâ に變るといふ一つの變り方であるが、ヘボン式で oshâ, tachâ と書くと、それ等が同種の變化だといふことが分らない。

4. 漢音の反切。漢字の音を漢字の字引で引くときに、「何々切」とあるの、例へば「加」が「古牙切」とあるのは、k (o-g) a の初と終りとで「加」の音を知るのであるが、「地」を見ると「徒利切」とあるから t (o-r) i で自然に日本式の ti を得る。

（二）一般の日本人に納得され易く、

（三）小學校生徒に教へられ易く、その上

（四）日本人及び日本語本位といふ點で吾々の大きな目的の自覺を促す効能が頗る大きい。

サ sa	シ **shi**	ス su	セ se	ソ so	シヤ **sha**	シユ **shu**	シヨ **sho**
タ ta	チ **chi**	ツ **tsu**	テ te	ト to	チヤ **cha**	チユ **chu**	チヨ **cho**
ハ ha	ヒ hi	フ **fu**	ヘ he	ホ ho	ヒヤ hya	ヒユ hyu	ヒヨ hyo
ザ za	ジ **ji**	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジヤ **ja**	ジユ **ju**	ジヨ **jo**
ダ da	ヂ **ji**	ヅ **zu**	デ de	ド do	ヂヤ **ja**	ヂユ **ju**	ヂヨ **jo**

十

五十音圖が日本語における諸音の關係を最もよく表してゐること、從つて日本式綴り方が日本語に適してゐることの證據は種々あるが、次ぎの實例は特に著しい。

1. 動詞の變化、日本語の文法で同種類に屬してゐる動詞「書く」「汲む」「押す」「立つ」の變化をとつて見るに、日本式では四つの動詞が全く同じ型で行くが、ヘボン式ではさう行かない。この外、文語の文法で中二段下二段に屬する「落ち落つ」「捨て捨つ」を同種の「起き起く」「受け受く」と比べて見ても、全く同様である。

2 音便の變化。「玉、赤玉」「近い、手近い」「連れ、道連れ」は、

則正しいことである。

1. はねる音には凡て n を使ふ、例 Anma, Kanban

2. つまる音には次に來る k s t p を二つ重ねて書く、例 Sekkei, Ressya, Detti, I
sappari.

3. 引く音には母音 a i u e o に ∧ をつけ又は（特に大文字の時は）母字を二つ
書く、例 Kôbe, Oosaka, Tôkyô 大文字のみならば TOOKYOO.

4. ヤ行のイエ、ワ行のウはア行のイエウと同じこと。

九

これまで世間に出た綴り方で、日本式と違ふのが種々あるが、中でも廣く行はれてゐるの
外國人外國語關係の方面で發達して來たヘボン式綴り方、又はそれと同種の綴り方で、サ行
行ハ行ザ行が規則正しくなくて、次ぎのやうになるものがある。

五十音圖は、下に述べる通り、日本語における諸音の關係を最も正しく表してゐるものであ
るから、日本式綴り方は

(一) 日本語の性質に最もよく適してゐるのみでなく、

八

これらの利益と効果を目的として、現在最も正式と認められるローマ字の綴り方は次ぎのような日本式綴り方である。それの特徴は五十音の各行に一定の父音を使ひ、拗音の綴り方が

日本式ローマ字

	ア A,a	イ I,i	ウ U,u	エ E,e	オ O,o	拗音 -ya	-yu	-yo	-wa
K,k	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キヤ kya	キユ kyu	キヨ kyo	クワ kwa
S,s	サ sa	シ si	ス su	セ se	ソ so	シヤ sya	シユ syu	シヨ syo	—
T,t	タ ta	チ ti	ツ tu	テ te	ト to	チヤ tya	チユ tyu	チヨ tyo	—
N,n	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニヤ nya	ニユ nyu	ニヨ nyo	—
H,h	ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho	ヒヤ hya	ヒユ hyu	ヒヨ hyo	—
M,m	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミヤ mya	ミユ myu	ミヨ myo	—
Y,y	ヤ ya	(イ i)	ユ yu	(エ e)	ヨ yo	—	—	—	—
R,r	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リヤ rya	リユ ryu	リヨ ryo	—
W,w	ワ wa	ヰ wi	(ウ u)	ヱ we	ヲ wo	—	—	—	—
G,g	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギヤ gya	ギユ gyu	ギヨ gyo	グワ gwa
Z,z	ザ za	ヂ zi	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ヂヤ zya	ジユ zyu	ジヨ zyo	—
D,d	ダ da	ヂ di	ヅ du	デ de	ド do	ヂヤ dya	ヂユ dyu	ヂヨ dyo	—
B,b	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビヤ bya	ビユ byu	ビヨ byo	—
P,p	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピヤ pya	ピユ pyu	ピヨ pyo	—

ローマ字文の發達は出來ない。

六

マ字は兒童から使はせろ、大人にローマ字を使はせる見込はないといふ意見もある。吾實地經驗する處では、ローマ字文は十分大人の使用に適してゐる。一體、社會にローマ字れないのに、兒童にそれを敎へることは無意義であるし又さういふ方法で出來るローマ發達は、人工的で自然的でないから、結果がよいと限らない。ローマ字の普及は是非一社會に次第に廣くそれが使はれて、兒童はそれに伴つて必要上敎へられるやうになるのが且つ安全な方針である。

七

ーマ字の實行は政府が法律で發布すべしといふ意見もある。今の世は、實質の伴はない法令は何時でも廢される虞があるから、これを的にすることは、この重大な問題を扱ふ適當方針でない。是非ともまづ社會に確な地盤を作つて、別に要求しなくても自然にローマ字使の法律の出來るやうに、或は寧ろさういふ法律の必要もないやうにすべきである。

三

ローマ字は字形が簡便で、言ふ通りに書くから、適當な漢字を捜すこともいらない、又ライノタイプ、タイプライターその他種々な文明の器械を利用することが出來る。

四

漢字と假名を使つてゐると、書いた日本語が外國人に分らないため、いらざる誤解や反感を招き、國家としてまた個人として蒙る損失は決して少くない。ローマ字ならば、外國人にも學ばれ易く、外國で印刷も自由であるから、種々な方面で日本語並に日本人の世界的發展にも大きな利益を與へる。

五

國語の整理は、漢字を使つてゐる間は、それの必要が感せられないから、とても行はれない。それはローマ字の行はれることによつて初めて進行するもので、ローマ字文の研究の大部分は國語の整理である。卽ちローマ字文の發達を措いて國語の整理は出來ないし、國語の整理を措

日本式ローマ字綴り方に就て

一

日本では漢字を日用の文字にしてゐるために、國語の教育に甚だ多くの時と力を費し、しかも効果が擧らない。例へばドイツの小學兒童が六の事を學ぶ間に、日本の兒童は僅に一の事しか學び得ない、又義務教育を終つたものも普通の用が足りない、これは世界における國家の生存、國力の發展から見ても、また人類としての文化の上から考へても、棄ておき難い。これを救ふのがローマ字使用の最も重大な目的である。

二

現在漢字を使つてゐる結果、國語が主に目で見る語になつて、本當の日本語即ち口で云ひ耳で聞く日本語が發達しない。電話、電信、講義、演說、議會や裁判所の辯論などに意味のわからないことや誤解や行違の多いのはそれの證據である。ローマ字を使へば、書く語と云ふ語とが平行にゆくから、日本語が初めて眞正の發達を遂げ、こんな不都合もなくなる。

（三七）　すめらぎの歌

頼山陽

天地の開けし時ゆ
とこしへと傳はるみいづ
帝には氏かばねなし
久方の天つ帝ぞ
すめらぎは日月のごとく
萬代にうつろひあらず
周の德高しと言へど
八百年を僅かに經たり
秦となり漢となりつつ
ふた千年今に及びぬ
その間にも氏は變りて
かはりぬと見ればあとなし

うち仰ぐ日出づる國は
代代つぎつぎ御榮えのかしこくあるかも
大窪行

（三七）　すめらぎの歌

頼山陽

天地の開けし時ゆ
とこしへと傳はるみいづ
帝には氏かばねなし
久方の天つ帝ぞ
すめらぎは日月のごとく
萬代にうつろひあらず
周の德高しと言へど
八百年を僅かに經たり
秦となり漢となりつつ
ふた千年今に及びぬ
その間にも氏は變りて
かはりぬと見ればあとなし

魚こそ跳れかしこ波間
きらめく金星月さながら

（三六）兵兒の歌

賴山陽

裾はすねまで
袖は腕
腰の劒は鐵も斷つ
人がさはれば人を切り
馬がさはれば馬を切る
若さを誓ふ兵兒仲間
北の客人來るならば
えんしよさかなに彈丸會釋
それを聞かずに來るならば
首に刀をひきでもの

ひんがしの海の水もち
そそぎ出だす眞玉のはちす
地にふむ國は三國ぞ
空にひらく花こそ八ひら
雲霞麓にいむし
日も月も峯にかからず
類なきものにもあるかも
山の山富士の高嶺は

柴　栗　山

（三五）天草の洋に船がかりして

雲か山か吳か越か
靑ひと條の水や空
天草の沖に船はてて
とまの煙の夕づく日

いづれか秋にあはではつべき

（三三）　兒島高德が櫻に記す圖に題す

李　白

山また山なる雲をこえて
み輿はいづこに今日はあはれ
蓑きてしのぶは虎のいはや
一ふり探るか鰐の淵へ
みくにを思へど身は我のみ
光をかへすも寂し空手
涙ににじめる二行の文字
櫻に記して九重まで

齋藤監物

（三四）　富士の山

漢の帝の色好み
黄金高殿奥深く
空の上よりはくつばは
風のまにまに玉となりぬ
いとしき巣のうすなさけ
ねためばいようとまれて
身はとらはれの術もなさ
御車の音は聞きながら
雨落ちては空に上らず
水こぼれては元に還らず
君の心とわが胸と
流はいつか西東
昔あでなる花ふやう
今ははかなし思ひ草
色香はあするくやしさよ

（三一）思

若きより遠近に行き
そぞろなりや四方に遊べば
見はるかす天地ひろみ
山川のはてさへ知らず
鳥は飛ぶ思のままに
うら寂し木木ぞそびゆる
高きに立ちふりさけ見れば
古へに心はいたむ
たたずみて雲路の末に
かけらまし翼もあれや

劉基

（三二）はかなさ

空仰ぎ歌悲し
涙はてなく

高青邱

（三〇）妻の詞

背ありと誰か言ふ
われ棄ててみまかりましぬ
誰か言ふ子なしと
生きうつしかこひ女の子ぞ
子はふみ讀みわれは麻なひ
ねや寂し夜夜のあさ鳥
子は名を得吾は嫁がねば
かくりよに安らへわが背や

高青邱

へだつれば人も尋ねず
谷深み鳥の飛びかひ
蓮の葉にふさふ衣や
苗肥えて飯にかなへり
來ては去る潮のほとり
われもまたいざ歸らまし

鄭常

（一九） 悲しむ歌

旅路こごし
人も馬も飢えぬ
富みて老いんよは貧しとも若からし
うまし遊ぶよはうらぶれて歸りなむ
浮雲や風のまにまに
草も木も皆枯れはてぬ

（二七）　山寺に遊ぶ

行き行きて行きてただすむ
行きつくや白雲の中
容見れど思濤らに
僧に逢へば心ぞ靜か
眞淸水は谷に分れて
小徑いくつ山につづくか
たかむしろここの御寺に
遊ばましふつ日ふたよさ

李　村

（二八）　刑逸人に寄す

羨まし浮世をよそに
心せくものも無き君

たけをらば腕も惜しまじ
ただ思ふわが名のほまれ
別れをば何嘆くべき

陸龜蒙

（二六）事に感じて

年若く何かなしけむ
老いてなほ事もはたさず
人は言ふかれは死にきと
我もはたいとふ命ぞ
くに一つ持ちぬべき身を
あだし世になづむ心よ
百年やひと笑ひなる
名はむなし安けさもなく

元好問

水白しひんがしの城
ここにしていざ別るれや
かぢまくら行手ぞ遥か
旅ごころ浮雲のごと
友の情入日に似たり
手をふりて今はと去れば
うら寂し駒のいなき

李　白

（二五）別　れ

ますらをや涙はあれど
そそがじを別れの時に
つるぎたちとりて酒汲め
旅人のかほばせはせじ
蛇まむしよし手をささば

B

短歌集	石川啄木著	4
詩集	石川啄木著	5
小説集（上）	石川啄木著	6
小説集（下）	石川啄木著	5
評論感想集（上）	石川啄木著	4
評論感想集（下）	石川啄木著	（近刊）
書簡集（上）	石川啄木著	5
書簡集（下）附年譜	石川啄木著	（近刊）
選歌集	石川啄木著	（近刊）

（以下續刊）

死の舞踏	ストリンドベリイ著 山本有三譯	2
奈落の人々	ロンドン著 和氣律次郎譯	3
爭鬪	ゴルスワオシイ著 和氣律次郎譯	2
無名作家の日記 他廿三篇(短篇小説篇 現代物1)	菊池寛著	5
出世 他廿七篇(短篇小説篇 現代物2)	菊池寛著	4
恩讐の彼方に 他廿八篇(短篇小説 時代物)	菊池寛著	5
噂の發生 他廿六篇(短篇小説 集補遺)	菊池寛著	4
父歸る 他廿三篇(戯曲篇 現代物)	菊池寛著	5
藤十郎の戀 他十九篇(戯曲篇 時代物)	菊池寛著	5
眞珠夫人	菊池寛著	6
慈悲心鳥	菊池寛著	4
新珠	菊池寛著	5
火華	菊池寛著	4
受難華	菊池寛著	5
赤い白鳥	菊池寛著	3
明眸禍	菊池寛著	5
新女性鑑	菊池寛著	3

陸の人魚	菊池寛著	4
第二の接吻	菊池寛著	3
東京行進曲	菊池寛著	3
結婚二重奏	菊池寛著	3
不壞の白珠	菊池寛著	3
イブセン全集(一)	河野永田小寺譯	3
イブセン全集(二)	大山長谷部河野譯	5
イブセン全集(三)	中村仲木譯	5
イブセン全集(五)	大山大關中村譯	6
ボルシエヴイキの手記	ピアトニツキー著 三矢剛譯	4
聖書物語(舊約の巻)	ルーン著 神近市子譯	(近刊)
聖書物語(新約の巻)	ルーン著 神近市子譯	(近刊)
洋服簞笥	トーマス・マン著 六笠武生譯	2
今戸心中	廣津柳浪著	3
嬰兒殺し	山本有三著	3
芭蕉・夜船・草の詩	吉田絃二郎著	3
ドレフュース事件	大佛次郎著	3

新人國記	ア・フランス著 木村恭一譯	4
シラー詩集	小栗孝則譯	4
どっこいおいらは生きてゐる!	トラア著 瀬木達譯	2
獄窓から	和田久太郎著	5
人波	アルツイバアシエフ著 原久一郎譯	3
結婚の悲劇	アルツイバアシエフ著 原久一郎譯	5
苦難の路(上)	ア・トルストイ著 原久一郎譯	4
苦難の路(下)	ア・トルストイ著 原久一郎譯	(近刊)
芭蕉書簡集	萩原羅月著	3
矢島柳堂	志賀直哉著	2
焚火	志賀直哉著	2
老人	志賀直哉著	2
網走りまで	志賀直哉著	2
速夫の妹	志賀直哉著	2
好人物の夫婦	志賀直哉著	2
雪の日	志賀直哉著	2
暗夜行路	志賀直哉著	3

日輪	横光利一著	1
勞働者の居ない船	葉山嘉樹著	1
海に生くる人々	葉山嘉樹著	2
小公子	バーネット著 若松賤子譯	2
ホワイト・ファング	ロンドン著 堺利彦譯	3
はやり唄	小杉天外著	3
自選歌集 朝の螢	齋藤茂吉著	2
自選歌集 十年	島木赤彦著	2
自選歌集 川のほとり	古泉千樫著	2
自選歌集 松の芽	中村憲吉著	2
自選歌集 海やまのあひだ	釋迢空著	4
自選歌集 立春	木下利玄著	2
自選歌集 花樫	北原白秋著	3
自選歌集 人間往來	與謝野晶子著	2
自選歌集 槻の木	窪田空穂著	2
自選歌集 野原の郭公	若山牧水著	2
自選歌集 原生林	前田夕暮著	3
自選歌集 空を仰ぐ	土岐善麿著	2
白秋作曲 童謠集	北原白秋著	2
白秋作曲 國民歌謠集	北原白秋著	2
白秋作曲 舞踊詞集	北原白秋著	2
背德者	アンドレ・ジッド著 石川淳譯	2
チエホフ書簡集	内山賢次譯	5
鶯の卵	土岐善麿著	3
愚庵歌集	齋藤茂吉編	(近刊)
芭蕉遺語集	荻原井泉水校訂	(近刊)
一茶 七番日記(上巻)	荻原井泉水校訂	4
一茶 八番日記(下巻)	荻原井泉水校訂	4
おらが春	荻原井泉水校訂	(近刊)
新花つみ(蕪村日記)	荻原井泉水編	(近刊)
寡婦マルタ	オルゼシュコ著 清見陸郎譯	3
句集虛子	高濱虛子著	6
井泉水句集	荻原井泉水著	5
サニン	アルツイバアセフ著 武林無想庵譯	6
一青年の告白	ジョージ・ムーア著 辻潤譯	3
一週間	リベディンスキー著 池谷信三郎譯	2
室生犀星詩集	室生犀星著	5
千家元麿詩集	千家元麿著	3
横瀨夜雨詩集	横瀨夜雨著	5
修禪寺物語	岡本綺堂著	3
少年の悲哀	國木田獨步著	2
運命論者	國木田獨步著	2
愛慾	武者小路實篤著	2
作者別萬葉全集	土岐善麿編著	6
作者別萬葉以後	土岐善麿編著	6
自傳	片山潜著	3
日本橋	泉鏡花著	5
佛蘭西家庭童話集(第一巻)	ボーモン夫人著 長松英一譯	3
佛蘭西家庭童話集(第二巻)	ドルノア夫人著 長松英一譯	5
佛蘭西家庭童話集(第三巻)	ペロー著 長松英一譯	3
巴里の憂鬱	ボオドレエル著 三好達治譯	2

改造文庫第二部目錄

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國内を震撼し、日々數千通の感謝狀が舞ひ込んだ。今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無產階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して玆に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その內容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、內容嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。

□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。

□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜を考慮に容れて之を示す。

□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその册子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす。但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。

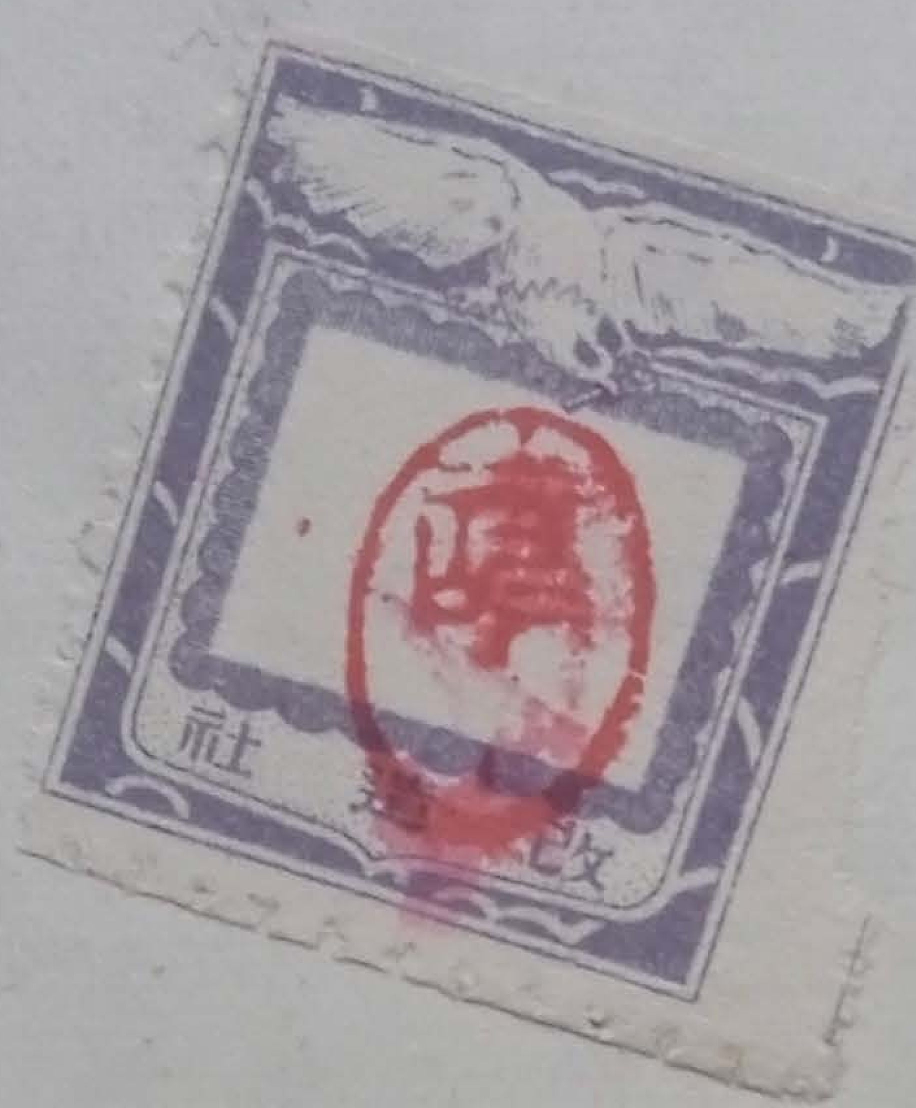
□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價（錢）	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料（錢）	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

（篠山製本）

昭和七年四月一日印刷
昭和七年四月五日發行



改造文庫 第二部 第七十二篇

鶯の卵 定價三十錢

著者 土岐善麿

發行者 山本三生
東京市芝區愛宕下町四ノ四〇

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二一番 至一一二四番

株式會社秀英舍印刷

この外にも種々の例證があるが、すべての場合に、タチツの關係は、カキクやマミムの關係と全く同樣であり、又シャチャ等もキャミャ等と全く同樣に使はれる、卽ちチツシャチャその他すべての音は ti tu sya tya 等日本式綴り方が表す通りの資格を以て使はれてゐるのである。これが卽ち日本式が日本語における諸音の關係を正しく表してゐるといふ理由である。

十一

人によつては、五十音圖が發音學的に規則正しい組立になつてゐないために、それが誤つてゐる・從つて日本式綴り方は正しい綴り方でないと云ふが、發音學的に云へばヘボン式とても極めて不完全なものである。(shi や chi や fu が英語から取つた綴りであるに拘らず、英語の音とは著しく違ふ、その他 ni や鼻にかかる ŋ やジヂズヅの區別を表さないことなど)、五十音圖の或る音が發音學的に規則正しくないのは、日本人の趣味や癖に應じて音を變更したものと見るべきで、その音の本質卽ち內に備はる資格は五十音圖の通りで規則正しいのである。

十二

一體實用上の音は、地方と人と場合とに應じて種々の程度に自然に變更されてゐるのは當然

十四

日本式が便利なことは、綴り方が規則正しいから、外國語や發音學を知らない小學校兒童や一般の日本人に極めて容易に合點される點で明かである。東京市內の小學校で前後十二組の小學校兒童約千人に敎へたところによると、日本式を主にして敎へれば、十分に練習をなしつゝ筆記體やヘボン式迄敎へるのに、僅か十四時間から十八時間迄であつたことなど、不規則で複雜な英語風のヘボン式を主にしては到底見られないことである。

なことであるから、さういふ變更を一々書き表すことは、徒に煩しさを增すのみで、何の必要もないことである。例へば九州の人の「ヒト」と東京の人の「ヒト」と東北の人の「ヒト」と皆音に多少の差があつて、しかも皆同じ日本語を使つてゐると思つてゐる、その同じと思ふ日本語の書き方が問題なのである。これを見ても國語の書き方が音一點張りでは行かれないことが知れる、（これは實際の狀態を云つてゐるので、標準語を定めるとか、訛りを正すとかいふ問題とは全く無關係である）。音の自然的變更を度外視するとすれば、五十音圖が規則正しいものとするに異論があり得ない。最近の音韻學において說かれるフオニームの學理は正しく日本式の主張を支持するのである。

十三

なほ、立入つて云へば、思想を書き表はすことを目的とする人からいふと、例へば「書か書き書く書け」の種々の形を使ふのと「立た立ち立つ立て」の種々の形を使ふのとが全く同樣な關係なのであるから、それを同樣に書く方が道理にも協ひ簡單にもなるのである。その他の場合も皆同樣に云はれるわけで、音の實際の使ひ途から見て五十音圖が規則正しいことは、つまり音を使ふ人から見れば五十音圖が規則正しいといふことになるのである。